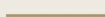




案山子
二〇二四 冬



新潟大学文学部



目次

案山子二〇二四 冬号	
案山子二〇二四 冬号	3
目次	
目次	7
目次	8
二〇二四冬 お題作品『育』	
二〇二四冬 お題作品『育』	11
シアンの鏡像 / 岩崎ひのり	
シアンの鏡像 / 岩崎ひのり	15
肉薄 / 渡邊望生	
肉薄 / 渡邊望生	39
めらめら / 高瀬静	
めらめら / 高瀬静	43
星墜の海 / 今泉とびら	
星墜の海 / 今泉とびら	57
奥付	
奥付	67

案山子二〇二四 冬号

案山子二〇二四 冬号

案山子二〇二四 冬号

目次

目次

目次

○冬号 お題作品『育』

シアンの鏡像	岩崎ひのり
肉薄	渡邊望生
めらめら	高瀬 静
星墜の海	今泉とびら

二〇二四冬 お題作品『育』

二〇二四冬 お題作品『育』

二〇二四冬 お題作品『育』

シアンの鏡像 / 岩崎ひのり

シアンの鏡像 / 岩崎ひのり

シアンの鏡像

岩崎ひのり

午前十時三十五分、簡素な橋の袂にて、アーサーはぼんやりと人を待っていた。少し濁った川のせせらぎを聞きながら、あの子が無事にここまでたどり着けるか、薄っすらとした不安に駆られていた。しかし、その心配もすぐによそへ飛ぶ。ゆったりとした穏やかな声が近づいてきた。

「ごめん。ちょっと遅れたね、アーサー」

待ち合わせ相手のレイチェルは申し訳なさそうに頭を垂れながら登場した。いつも何を考えているか分からない表情をしているが、今日はどことなく楽しそうな様子に見える。緩やかに上がった口角がそれを示しているかのようだ。

「大丈夫。僕も今来たところだよ〜」

「そうなの。それじゃあ、案内してもらってもいい？」

「勿論。着いてきて」

アーサーはよくある待ち合わせの定型句を述べながら、微笑んで彼女に答えて、二人並んで橋を渡り始めた。レイチェルは物珍しそうに辺りをきょろきょろと見回しながら歩いていた。見失わないようになのか、時々チラリと隣の相手を見つめる。彼女の青い瞳に自分の姿が映っているのが分かったと、鼓動が急速に早まるのを感じる。じわじわと体中に響く感覚を悟られないように、アーサーは自然な振りをして微笑み返して見せた。

今日も二人で何度目かのお出かけだ。ちょっと親しい、数少ない『友人』とお出かけ。大抵同じような場所だし、会話もそれほど多くはない。それでもアーサーはえも言われぬ感情の波に浸っていた。レイチェルといるのはそんなに嫌じゃないし、どこか晴れ晴れとした気持ちだった。好奇心旺盛な幼子のように周りを見渡すレイチェルを横目に、二人が出会ったときの記憶を思い巡らせた。

大学に入って勉強して、友人を作り交流を深め、アーサーはそれなりに充実している毎日を送っていた。ただ、週に一回忙しく過ぎていく時間から逃げるように、美術館に足繁く通っていた。有難いことに、周辺の美術館の常設展は入館料が無料だから、特に何も気にすることなく何度も足を運ぶことが出来た。そうして何時からか美術館が羽を休められる安息の場所となっていた。ここは人の雑音、人との関わりを何も気にしないでいられる。毎日頑張っているのだからこれくらいのご褒美は許されてほしい、いつもそう考えていた。

半年前の春、マグノリアが咲き誇る頃にいつものように美術館に赴いた。これから僅かな春休みということで、どこか解放感を味わいながら街中を歩いていった。そこで不意に同い年くらいの少女とぶつかってしまった。幸いにもアーサーは転ばなかったが、ぶつかった少女は尻もちをついてしまった。慌てて大丈夫かと声をかけ、少女を助け起こした。彼女こそレイチェルだ。彼女は何が起きたか分からない様子でぼーっとしていた。立ち上がった時もなんとも言えない表情で立ち尽くすだけだった。

背丈は頭一つ分小さく、綺麗な青い瞳を持っているが、いまいち掴みづらい彼女の様子にアーサーは少し戸惑った。怪我は無いか、何か落としたりはしなかったかと質問しても、どこか素っ気なく「いいえ」「大丈夫です」と言うだけだったのだから。彼女は自身の胸元に付いている花のブローチをつけ直し、手提げバックを片手に立ち去ろうとした。「ご心配ありがとうございます。……いろいろとすみませんでした」

ふらりと自分の横を通り過ぎるその姿が妙に焼き付いて、思わず後ろを振り返った。そこには魅力的な後ろ姿というより、行くあてもないまま彷徨う頼りない少女の姿があった。あまりにも危なっかしい足取りで人の波に突っ込もうとするため、無視することも出来ずアーサーは彼女の元へ近づいていった。

「あの、どこか行きたい場所があるなら案内しましょうか。ちょっと、今の貴女は……」

若干語気が強くなってしまったのを感じ、途中で口を噤むも、何となくこの少女を放っておく訳にはいかないと感じた。今の相手は驚いているのか怖がっているのか、何も分からない。大きな青い瞳をぼちくりと瞬かせていた。しばらく見つめあっていたが、言いたいことをやっと理解したようで、彼女は「実は……」と切り出した。

「私、ここに来るのが初めてなもので……。自分の行きたい場所が分からなくなっていますね。〇〇美術館という場所って知っていますか？」

か細い声でアーサーの顔を覗き込みながら尋ねた。〇〇美術館は今こそ行こうとしている場所だった。彼女はあろうことか目的地の反対方向に進んでいたが。

「貴女が行こうとしている場所はこっちです……。そっちには何も無いですよ」

呆れた声でそう伝えたものの、彼女は表情を変えないまま納得した様子を見せた。

「なるほど。そうだったんですね」

「うん……。でもちょうど良かった。僕もちょうどそこに行くところだったので。よければ、一緒に行きましょうか？」

「良いんですか？　ありがとうございます」

心なしか彼女の声色はどこか安心したように聞こえた。どちらにせよ、目的地が同じなら一緒に行くに越したことはない。このままさようならというもどこか気がかりだ。こうして二人並んで〇〇美術館まで歩いていった。特に会話も無く、雑踏に飲み込まれないように。

数十分後には〇〇美術館に着いていた。道中で彼女は何度も周りの景色をあちらこちらと見ていたので、何かやらかしはしないかとアーサーは不安に思ったが杞憂で済んだ。

「着きました。あとは、僕が居なくても大丈夫ですよ？」

「大丈夫です。ありがとうございました。あなたは、とても優しいですね」

「はは、そうですか」

これは意外な言葉だった。まさかそんな風に言われるとは。しかし、彼女の表情がい

くばくか和らいで僅かな微笑みを見せていることに気づけば、それが彼女にとっては嘘偽りないことであると分かった。せっかくの甘い褒め言葉だ、アーサーは素直に享受することにした。

「それじゃあ、あなたもどうか楽しんで」

レイチェルは律儀に礼の言葉を述べてお辞儀をした。そして、先に美術館の中へ入ってしまった。はあ、と深い息を吐いてからアーサーも後に続いた。この時は何だか変わった子に会ったなあくらいにしか思わなかった。会うのも今日限りだろう、と。

けれどもどんな運命か、二人はその日の美術館内で何度も鉢合わせすることになった。最初こそどうもという具合に会釈をしたが、それが重なれば段々と鬱陶しくなるものだ。レイチェルはそこまで気にした風でもなかったが、さすがに帰ろうとする時まで一緒だったのはどこか思うところがあったようだ。

「そういえば、あなたの名前を聞いていませんでした。えっと、名前はなんと……？」

静寂を破るように、彼女は尋ねた。アーサーは尋ねられてもすぐには答えられなかった。何度も遭遇したが別にもう会わないだろうし、これでお別れだと思っていたばかりに。困ったなという気持ちはうまく隠しきって自分の名前を言った。

「……アーサー、僕の名前はアーサーです」

「分かりました。私はレイチェルといいます。……これも何かの縁ですね？」

二人は愛想笑いを浮かべながら美術館を出た。再び沈黙が気まづくなり埋め合わせるために何かしら会話をして、アーサーは帰路についた。せっかく安息の場に行ったというのに、この日はかえって疲れに行ったようなものだった。

その夜、それでもレイチェルのことは頭から離れなかった。彼女が別れ際に言った言葉がやけに脳裏で繰り返される。

「初めて行ったんです、美術館。とても楽しいところです」

薄く微笑むレイチェルの瞳が、その瞬間ひと際輝いていた。今日という一日がこんなにも充実した良いものだったというように。その姿、瞳がとても眩しくて羨ましくすら思えた。実際、館内で作品を鑑賞するレイチェルは、憧れと好奇心を兼ね備えた瞳を作品に注ぎ、至極真面目な姿で作品と対峙していた。花のように凜としながら、儂い美しさを保っていた。

アーサーはその日の記憶が悶々と湧き出てくるのをなんとなく恥ずかしく、必死に抑えこむように枕に思いっきり顔をうずめてから眠りに落ちた。

「アーサー？ 私に何かついている？」

ゆっくりとした声がふと耳に差し込んできた。過去の回想に耽っていたが、どうやら見つめすぎてしまったようだ。

「いいや、何でもないよ。少し考え事してただけ～」

アーサーはにこやかに笑いながら言葉を返す。レイチェルは納得したように頷き、また辺りを見渡し始めた。

半年前の出来事はアーサーにとっていい刺激になった。その後もレイチェルとたびたび〇〇美術館で会い、話をする機会がどんどん増え、気づけば二人の距離は自然と近

くなっていた。〇〇美術館は広く、展示物も多いため、一日で回りきることは不可能だ。彼女は何度も足を運んで、何度も作品を鑑賞する機会を楽しんでいたようだ。

なぜここまで彼女と親しくなれたのだろうか、とアーサーは時々考える。美術館へ赴くようになったのは、ちょっとでも人との関わりを減らす時間が欲しくて、少しでも静かで穏やかな一日を過ごしたいと願った結果だった。人と話すことは卒なく出来ていると思う。けれど、もともと人間関係にどこか線引きをしておかないと、自分が壊れそうな気がしてならない。深い関係を無意識に避けてしまうのだ、面倒くさい性分だとアーサーは薄々感じていた。

それでも、レイチェルといるのは悪くない。見ていてハラハラするところもあるが、彼女との時間は楽しい気もする。彼女はいつだってアーサーの取り繕った言葉を興味深そうに聞くから、何とも言えぬ感情が沸き上がっていた。そんなレイチェルが不思議だったが、彼女のこともっと知りたいという気持ちにもなった。

「アーサー、あれが ECE 美術館？　すごくきれいな建物」

少し興奮の混じった声色がアーサーを呼ぶ。今日の二人は別の場所に出かけている、新たな出会いと密かな期待を胸に。

気にしなくてもいいはずだ、レイチェルといる楽しい時間は本物だって信じればいい。アーサーはそう自分に言い聞かせた。それなのにずっと変な焦燥に駆られている。ざわざわとした気持ちの悪い棘に胸を刺されている感じだ。何か昔の淡い記憶が芽を出してくる。

——きっと、いきなり彼女と関わりを深めすぎたからだ。僕が人に慣れていないから……。そう考えておこう。心配いらない、大丈夫。

一度深呼吸してから、アーサーはレイチェルに話しかける。

「うん。本当にきれいだね～。僕もここに来るのは初めてなんだ」

「それなら、きっと楽しめると思う。どんな世界を見れるんだろう」

レイチェルはゆったりと、しかし軽やかな動きを見せていた。一歩前に進んでから振り返ったその顔は穏やかだが、瞳の輝きは隠せない。普段の読めない顔のように見えて、好奇心を抑えきれないという顔をしている。

レイチェルと関わってみて少し気づいたのは、彼女が思った以上に感情の起伏があるということだった。普段は何を考えているかを悟らせられないような雰囲気が出ているのに。

——僕より情熱も冷静さもあって、感情のコントロールに長けていて……。

ゆっくりとした足取りの少女を、アーサーも同じように歩きながら後をついて行った。

ECE 美術館は〇〇美術館よりも広く、展示物は負けず劣らず素晴らしいものばかりだ。〇〇美術館は現代アート寄りだったが、こちらは500年以上前からの作品も取り扱っている。毛色は違うけれども、ECE 美術館の作品も迫力がある。だから観光地としても人気。

アーサーはぼんやりと十九世紀のある画家の展示を見ている。海の景色、光の描写、全てが壮大で圧倒的。ECE 美術館の目玉である作品群だった。作者がこだわり抜いて作ったものたち。作者は何を思ってこれらの絵画を描いたのだろうか。その熱量はどこから来

ているのか、何を追い求めていたのだろうか。うまく言葉にするのは難しい。アーサーにはそれを表現する方法が分からない。

一点の絵画を覗いているアーサーの隣に、静かにレイチェルが近づいてきた。同じくその絵画を覗く彼女はアーサーよりもはるかに真剣に絵画を覗いていた。また瞳は瞬いている。もうすっかり絵画の世界に捕らわれている、いや、むしろ捕えている側かもしれない。レイチェルはこの絵画から何を思っているのだろうか？

「素敵な絵画。これは船と海……？ 空の色がすごく印象的」

「そうだね。一つの戦争が終わった後の時代。夕日の表現に作者はこだわり抜いたそうだよ」

アーサーは自然な相槌を効かせて、簡潔なコメントを言ってみた。自分の考えがまるで入っていない説明文みたいなものだが。

「この絵画の作者は、何を思って絵画を描いていたと思う？ 何が彼を突き動かしていたと思う？」

独り言のようにかすかな声の囁きが漏れ出る。それでもレイチェルはしっかりと考えようとしていて、しばらく思案顔で目を伏せた。そうして、答えが決まったかのように目を開く。

「彼はきっと、旅を愛していたと思う」

淡々とレイチェルは言葉を並べている。絵画とアーサーの顔を交互に見ながら、自分なりの解を出していく。

「戦争の時代もあったから哀しみが漂っているけど、それよりも力強い光と空気を感じる。世界をたくさん見ていないとこんな景色は描けない。こだわりが強い彼なら、旅をすることで理想を追い求めていたのかも……」

全部自分の想像だよ、レイチェルはそう言いたげにアーサーを見つめてから、ずっと隣から離れて別の展示を見に行ってしまった。後を追いつつながら、先ほどの言葉を思い返す。愛するもの、理想の探求、言われてみればそういう視点もあるのか。作品との対話、それを通じて彼女が見たものはなんて純粹なのだろう。

口に出すわけでもないが、小さな称賛を浴びせたい気分だ。それと同時に、羨望と懐古の念も湧いて出てくる。その発想を言葉に出来るのが羨ましい。ぜひとも行けるなら、レイチェルの空想の世界へ行ってみたいものだ、とアーサーは思った。対して、自分の想像力の乏しさに少し情けなくなってしまった。

——いつの間にこんなつまらない人間になっちゃったんだろう。

無意識にそんな言葉が出てきたことに驚きを隠せなかった。アーサーの胸に歪な棘の刺さる気配がした。自分には無いものを持っているレイチェルがひどく眩しい。それもそのはずアーサーは熱心に作品を鑑賞していない。彼女を通して間接的に作品と対話をしている感覚だった。

レイチェルはふらふらと様々な作品に釣られていく。時代もジャンルも問わず、全ての展示物に目を配る。静かに作品を見つめ、時々会話をしながら館内を回っていた。彼女の考えを聴くたびに、靄のかかる心に違和感を覚えながらも、真っすぐ芯を持つ彼女の瞳、横顔、姿勢に心打たれる。どこかひどく懐かしい。彼女の姿は何かを連想させる。何かを思い起こそうとさせる。

——一体なぜ？ 覚えていないけど、どこかで会ったことがある？ ……こんな強気なことは流石に聞けないか。

「GCE 美術館、私の家から少し遠いから、滅多にここまで来ないのだけど……。いい作品ばかり。楽しい」

休憩所となっている簡易スペースで、無邪気にレイチェルは語った。長いこと立ちっぱなし歩きっぱなしだったため、足を労わるように撫でていた。他にも簡易スペースに立ち寄り、椅子に座り休む人やささやかな談笑をする人がぼつぼつといる。展示室ほどではないが静かな場所で、特に何をするでもなく二人は横並びに座っていた。目を細め、指先で何かをなぞるような仕草をしながら、レイチェルは感動に浸っている気がした。楽しんでる姿にじわりと温かさが広がっていく一方で、アーサーはレイチェルに問いかけた。

「ここにいる芸術家たちの持つような、表現とかって一体どういうものなのだろうね」

ここ最近漠然とアーサーの頭に浮かぶ疑問だった。純粹に何かを表すこと、自分を表すこととはどうやってするのか気になっているのだ。彼女に期待の目を向ける。これが微かな既視感の正体と呼び起こす糸口にもなってくれると信じて。

レイチェルは無表情のまま考え込んでいる様子を見せてから、うっすらと笑顔を浮かべて答えた。

「……たぶん、花みたいなものだと思う。花を自分の手で育ててつぼみになって、咲いたときに頭がいっぱいいろんな感情で満たされる。これと同じように、想像して表現する力を育てるの。そこから何かを生み出すことが出来たら、きっとすごく満たされるんじゃない？」

一つ一つ言葉を噛みしめるように、レイチェルは言葉を並べていく。それこそ、彼女の答えはこれまた想像力豊かで、本当に小さな少女を相手にしているかのようだ。

「もし、その花が枯れてしまったらどうするの？」

「そしたらまた新しく育てる、のかな。たとえ枯れてしまっても、完全に消え去ることは無い。新しい糧となってくれるはず。それに、それがあったということには変わりがないからね」

私たちもそうやってたくさん考えて、向き合って、生きていくんでしょう。そう言ってレイチェルはふっと笑った。すぐに元の読めない顔になってしまったが、耳にした言葉の一語一句が脳裏に響く。思わず軽い笑い声を出してしまった。

「そっか。じゃあそれは大事にしなきゃいけないなあ」

アーサーの返答に、レイチェルは再び微笑んだ。青い瞳が見ている。どきりと胸が高鳴ると同時に何かを何処か思い出す。何を言っているのだ、と呆れてしまうだろうが、アーサーは彼女から昔の自分の面影が見えた。

いろんなことに夢中で、いつもふわふわした感覚で生きていた。何も悩まずに、気になるものを好きなように楽しめたあの時。そう、昔の自分も問われたら、たぶんこんな風に答えていただろう、となんとなく予想がつく。自分自身のはっきりした考えも、何かを表現しようとする活力も、とうの昔に萎れてくたくたになったのが、アーサーには

今さら惜しく感じる。レイチェルが羨ましい、同時に昔の自分が羨ましい。レイチェルを通して見えたのは幼くて可愛かった自分。今の空虚な自分の姿をより浮き彫りにさせる過去だ。

「アーサー。また、展示を見に行ってもいい？」

レイチェルはアーサーの様子を慎重に伺いながら覗き込んできた。また考え事をしすぎてしまった。

「もし、まだ疲れているのなら、先に行っているからここで休んでいても……」

「いや、大丈夫。僕も行くよ。君がまたどこかに行ってしまうようにしないでだしね～」

「一緒にいてくれるなら助かる」

レイチェルは立ち上がって、アーサーと一緒に来ることを待っていた。心はいまだに鈍い。整理したいことはたくさんあるが、今はその時間じゃない。美術館という空間なのだ。作品との対話、そして目の前にいるレイチェルとの対話を大事にするべきだ。

今一度深呼吸をして立ち上がる。目の前にいるのは昔の自分じゃない。謎の劣等感を感じていることを悟られないように、アーサーはお得意の平然とした笑みを浮かべた。心配ない、笑えていると信じて、簡易スペースを後にした。

空にほんのりと赤みが射した頃、レイチェルと別れてそれぞれの家に帰った。リビングに入るなり、アーサーはソファに寝転がってしまった。その後も変わらずに館内の展示を見て回ったが、鑑賞にそれほど身が入らなかった。どこかレイチェルと話せば話すほど、幼い自分の姿に当てはまって仕方なくて、それにばかり意識を持っていかれてしまうのだ。

大きくため息を吐きながらふと目元を押さえた。どうにか作品に集中しようとした結果、目を酷使してしまったようだ。アーサーが疲れているのは目だけじゃなく全身もだるかった。汚泥のようにソファに沈みこんでいる。

——ああ、たった一日の出来事でこんなに憔悴するなんて思わなかったな。

がちり、と不意にドアの開く音がした。僅かに音のした方向へ体を動かす。

「ただいまー。アーサーは……、おっ。もう帰ってきてたんだな」

「ああ……、おかえり～」

軽快な口調で同居人はソファに横たわるアーサーを見下ろした。彼、イーサンはアーサーの従兄だ。十歳ほどしか年は離れておらず、訳あってティーンエイジャーの頃から彼と彼の両親と同居していたため、アーサーにとっては兄みtainな存在だった。

イーサンが社会人になって独立し、数年前に大学へ通うためアーサーは彼の家に転がり込んできた。一人暮らしから二人暮らしになったというのによく気にかけてくれるし、家は二人で住むにはまあまあ広く快適なものだった。かなりのエリートらしく、アーサーを養えるほどに稼いでいるのだろう。

いつでも爽やかな笑みを浮かべて、どんな相手にも平等に相手をする。おまけに、しっかりとした体躯に甘いマスク、ハンサムな男、多くの人の憧れの的だろう。欠点をおくびにも出そうとしない、ある意味素晴らしい人だ。関心の無い人間には最低限のコミュ

ニケーションしかとらないアーサーとは全く異なる。

——見目だって悪くはないと言われるけど、彼には到底追いつけないだろうしね。

嫉妬のような目を向けても、イーサンは嫌味もなく接してくれる。だからこそ、彼はアーサーが信頼している数少ない人だった。レイチェルとよく会っていることも彼には伝えていた。

「随分とお疲れのようだな。レイチェルちゃんとのデートで何かあったのか？」

「別にそんなんじゃないって……。そっちこそ、今日のデートで何かなかったの？」

「はは、生憎さっきまで対応していたのは壮年の相手方だったからな。デートはこれからだよ」

「……なるほどね。じゃあ今日はもう帰らない？」

「ああ、少ししたら時間だ。準備したらすぐに出る。戸締りだけは気を付けろよ」

「分かってるよ。そっちこそ浮かれすぎに気を付けなと〜」

ソファからようやく起き上がり、イーサンと軽口を言い合う。彼と話すときはそこまで遠慮しないで言葉を使うことが出来るのだ。

それにしても、今の彼は恋人にお熱なようだ。一年前くらいに出来たらしいが、詳しいことはアーサーもあまり知らない。イーサンにこんな夢中になれる相手が出るなんて。けれど彼が選んだ人ならきっと素敵な人だろうし、あんないい男に大事にされて相手も幸せだろう、そう思った。そんな風に誰かに恋する時が、自分にも来るのだろうか。

「それじゃあ、貴方が行ったら僕は自分の部屋で休むことにするよ。デート楽しんできてね〜」

ソファから準備へ向かうイーサンにゆるゆると手を振る。起きたもののやはり気だるい気分は晴れない。ご飯もお風呂も面倒なので、まだ少しだけだらけていたかった。

「……お前、やっぱり何かあったんじゃないか？」

「え、どうして？」

「最近、美術館へ行くたびに疲れた顔して帰ってくるからな。お前、結構分かりやすく顔に出るしよ」

心臓が変な跳ね方をした。アーサーは顔をこわばらせる。

「俺はその子に会ったことはねえし、デートで何をして何を話しているかも知らねえが、無理に会うもんでもないだろ。しょげた顔で帰ってきて、何も無いわけがないだろうが」

そうなのかもしれない。イーサンはもともとアーサーが美術館に行くわけを知っている。一人になりたがる性質を知っている。だからこそ、レイチェルと出かけるようになったことに驚いていたし、心配もしていた。だが、重荷を感じているのは美術館に行くことでも、レイチェルと会うことでもない。

「別に彼女と会うことは嫌じゃないよ……。僕が勝手にこうなっているだけ」

「じゃあ何か、お前がこうなっちゃう原因に心当たりはあるのか？」

「……うまく言えない。ただ、何かを言ったり表現しようとしたりするって難しいよねって」

ほとんど独り言を呟くような声でアーサーは答えた。自己表現の仕方が分からない自分と自己の世界を持っているレイチェル。レイチェルの仕草や姿、考え方にも惹かれている。でも、自分は彼女に過去の姿を重ねて羨ましがって勝手に苦しくなっているだけ

だ、と言葉にせずともそう思った。

ふと、アーサーは気づいた。自分はレイチェルについてどれだけ知っているのか。割と長い時間を共に過ごしてきたけれど、彼女自身のことを詳しく知らなかった。レイチェルのことをもっと知りたいし、あちらは好意的に接してくれているのに、彼女という個人とより深く関わることに消極的な自分がある。明るい姿を取り繕うことは出来るけれど、のらりくらりと仲良くなることは避ける。そんな風にどうにかして人と一定の距離感を保とうとする自分にアーサーは嫌気が差していた。

「別に大丈夫だよ。何かあったら相談するから。それよりイーサン、早く準備した方がいいんじゃない〜？」

「……まあ、お前が話したいときに話せばいい。いつでも相談に乗るぜ。昔からお前は考えすぎなところがあるからな。たまには違った息抜きをしてみてもいいんじゃないか？」

他にも尋ねたいことがあったものの、イーサンは太陽のように笑った。彼から見たらアーサーはまだ子供だ。本人は少し解せない様子だが、それでも、自分の心配をしてくれることにアーサーは感謝しなければ。苦笑いをして、彼の姿を見上げた。

しばらく時間が経ち、アーサーは一人自室のベッドに寝転んでいた。閉め切った部屋で何も考えずに目を閉じる……、なんてことは出来ず、頭の中はこんがらがっている。今日レイチェルとした会話がひたすら繰り返される。今の気分は、自分の中に欠けていたものを突き付けられた気がして凹んでいる。

けれど、確かに響くものはあった。あのやり取りが自分の脳内で再生される。『……たぶん、花みたいなものだと思う。花を自分の手で育ててつぼみになって、咲いたときに頭がいっぱいいろんな感情で満たされる。これと同じように、想像して表現する力を育てるの。』

表現は花のようだと言っていた。自分が育てることで開花するもの。うまく開花できたのなら、喜びや興奮で満ちるのだろうか？ 自分の感情をちゃんと具現できるようになるのか？

「花……」

鮮やかで輝いている花、小さく慎ましい花。花壇でも道端でも生きようと芽を伸ばす姿。アーサーの脳内にレイチェルの瞳の色が浮かんできた。ゆっくり時間が流れていく昼の海？ 興味を抱いたものを見るときそれは強い青色の光源のよう。見つめられると胸がなぜか可笑しい気分になる。

——青、花、僕を見つめる青い花。

アーサーは起き上がってテーブルの上に置いてあったノートを手に取り、無意識に手を動かしていた。青色のボールペンを取り出し、紙に滑らしていく。イーサンの言ったように、少し息抜きをしようと思ったのだ。ただ一心不乱に、あの花だけを見つめて。今まさに咲かんとする、美しい青色が脳内の景色に広がっている。もっと見てみたい、花開く瞬間を。残しておきたい、この花の一片を。

『別にそんなことしなくてもいいじゃない』

『たかが絵なんだから、何にも……』

チクリと痛む声が思考を妨害してきた。花は散っていくようにかき消されてしまった。

「あ」

ふと我に返り、手元のノートを見つめる。そこには描きかけの青い花があるだけだ。花弁が欠けて妙な形をしているように見える。

「はあ、やっぱり……」

ため息を吐いて、アーサーはノートを閉じた。こんな感じの拙い絵が半分以上このノートに埋まっている。誰に習っているわけでも、専門の学校に行っているわけでもない。自分の想像したものを描いているだけ。本当にただの気晴らし程度で、絵が完成したことは一度もない。というよりも、アーサーには完成させることが出来ないのだ。脳裏にあの言葉が響くから。

何かを表現することは楽しいだけじゃない。難しいし怖い。拒絶された時に心が壊れてしまいそうになる。もう二度とそんな目には遭いたくない。自分の感情をちゃんと伝えることを、怯えるようになったのはいつからだろう？ 花を育てようとしても、何かに芽をむしり取られて咲かせることが出来なくなっている。

アーサーはもう一度ため息を吐いてから、ベッドの中に潜り込んだ。今日はこれ以上何も考えたくない。明日起きた時、少しでも気分がましになっているといい。

「今度会うときは、もう少しレイチェルのことを知れたらなあ……」

次は余計なことを考えないように、しっかりレイチェルと向き合えるように、と身体を丸めながらアーサーは祈った。

あれから数週間経ったころ、アーサーは再びレイチェルと会った。会っていない間にもメッセージアプリでのやり取りがあったが、最近はお互いに用事が入り美術館に行く機会がとれなかった。そして、今回再会した場所も美術館ではない。アーサーは買い出しのためRストリートに並ぶ店の前を歩いていた。そこでレイチェルに話しかけられたのだ。

「久しぶりだね」と話す顔はいつも通り何を考えているかは読めない。それでも、声の調子は明るく聞こえた。ゆったりと動き話す姿には幼い子供の雰囲気を感じる。純粹で無垢な姿にアーサーはまた心を奪われそうになった。あるいは、また自分の子供時代が掘り起こされそうになった。最近まともにレイチェルのことが見られなくなっている。必死にそんな考えを消して、笑顔でレイチェルに挨拶をする。

「君も買い物に来ていたんだ。何か欲しいものがあるの？」

「ううん。ここに来たのは初めてで……。どんな店があるのかは分からないけど、良いものがあったら買ってみたいかなって思って」

レイチェルは特に目的も無いままここに来たらしい。Rストリートも初めてだということに、アーサーは少しだけ不安が過ぎる。

「君、またどこにいるか分からなくなっていないかな？」

「うん、そうなの。結構この場所入り組んでいるから」

あっさりと迷子になっていることを認めて、アーサーは呆気にとられた。何をやっているのだろうこの子は、と一周回ってかなり心配になる。

「また、あなたについて行ってもいい？」

「……うん、いいよ。僕の話し相手になってくれると嬉しいな」

ごめんなさいと小さく謝りながら、レイチェルは隣を歩き始めた。今ならレイチェルについて何か話すことが出来るだろうか。今日は美術館にいないから作品については語れない。より互いのことを話し合うきっかけになるかもしれない。

ふと、隣を歩くレイチェルはあるものに一瞬目を向ける。それは花があしらわれたネックレスだった。木製のネックレスの飾る淡い黄色の花は、ショーウィンドウの中でも一際輝いている。まるで太陽であるかのように。他にも、店の扉に飾られているフラワーリース、イチ押しと銘打っているフローラル系の香水、彼女は特に花と関連するものに興味津々だった。

「君は花が好きなの？」

レイチェルの様子から汲み取って早速質問を試みた。自然な導入は掴めた。違和感も無い、大丈夫だ。レイチェルは穏やかに笑みを浮かべて頷いた。

「うん、好き。花はその姿もだけど、香りも楽しめるし育てるのも面白いものだよ」

「確かに～。鑑賞するだけじゃなくていろんな活用法があるよね」

「他にもね、私は花の育つ過程が好きなの。雨に打たれても、地面に埋まっても、美しい花を咲かせようとするから。最後は枯れることになっても、一瞬の開花になるとしても、懸命に芽を伸ばすの」

そんな彼らの姿にひどく憧れているような素振りでもレイチェルは語る。含みを持たせて、自分の思いを昇華する方法を探り当てていくかのようにも見える。表現は花。アーサーはまた重ねてしまった。その寂しそうな横顔を、かつての自分の幻影に。そんな姿を覆うように、アーサーの口から自然と疑問が漏れ出した。

「君はいろんなところが初めてというけれど、あまりこういうところに出かけたことが無い？ それとも……」

大胆に飛ばしすぎたかもしれない。けれど、さきほどの会話の流れから絞り出された言葉はこれしかなかった。ずっと気になっていることではあったから。どこかレイチェルは儚さを纏い、目を離したらふっと消えそうな印象を持っていた。何か、彼女の複雑な心境が見えた気がしたのだ。

アーサーは答えに怯えながらも返事を待っていた。レイチェルの感情が荒ぶることは滅多にないだろうが、この時は微かに動揺の動きを見せた。どう答えていいものか、思い悩むように目を逸らす。

——これは、聞かれたくないことだったのか？

動揺がこっちにも伝わり、アーサーは思わず足を止めてしまった。レイチェルは心配そうに見つめてから、人の邪魔にならないようにストリートの端に誘導した。俯き気味でそわそわした様子のまま、レイチェルは小声でアーサーに語りかけた。秘密話を耳打ちするように。

「話すとき長くなるから、なるべく噛み砕いて話す。私は去年この街に来たばかりで、今は兄と二人暮らししてる。……もともと兄はこの街に何年も住んでいたけど」

話す順番を考えながらだからか、いつもよりもゆっくりとした口調だった。アーサーは今の自分に似た境遇だと思った。さらに聞いてみれば、もっと重い内情がレイチェル

にはあった。

「今はもう平気だけど、昔はそこまで身体が良くなかった。中等学校に上がるころにはだいぶ回復してたけど、また調子が悪くなって、そういうことを何度も繰り返してた。だからあまり外に出たことも無かったの」

少し自嘲気味に手を広げて見せる。そんな彼女の様子にアーサーは居たたまれない気持ちになった。嫌な予感はなんとなく予想していたはずなのに。

「ごめん。無理させてまで聞くようなことじゃなかったね。辛かったらもう終わりにしてもいいから……」

「無理してない、平気。ここまでいったらあなたには聞いてほしい」

それでも、レイチェルは打ち明けるのを続ける。深呼吸して、また過去に戻る。「本当はティーンエイジャーのうちにいろんな場所へ行ってみたかったし、触れてみたかった。けど、私の両親はとにかく心配して、外に出るにも何をするにもずっと付き添っていたの。私、あなたも分かっていると思うけど、危なっかしくてぼーとしたところがあるから、心配だったんだと思う。環境にも付き合う人にも口を出してきて……。優しくしてくれたけど、あまり自由とはいえなかったかな。いつも親の言うことが正しいことになっていた」

アーサーは眉を顰め、途端に心が暗く重みを増すのを感じた。親、束縛、自由。「両親の過保護が過ぎていたと分かったのは、兄が大学に行ってから。兄がいた時は比較的自由なことが出来ていた。彼がいなくなってからは出来なくなった。……きっと、ずっと兄が両親と話をつけてくれていたんだと思う。だから、兄と一緒に暮らさなかって聞かれた時は二つ返事についていくことにした。親と離れられるならそれでいいやの気持ちで。もう限界だったのかも」

「それで、君は美術館にやっと思行ったと……」

「うん。ずっと行きたかった場所。間近で本の中にあるような絵画を観ることが出来ることだなんて、夢のようだった。まあ、一人で出かけるのに慣れていなくて迷子になったけれど」

レイチェルははにかんで答える。先ほどよりも顔はリラックスしていた。

彼女の幼さ、世間知らずさ、放っておくとどこかに消えてしまいそうな雰囲気、そのどれもが今紐解かれた。これが全てではないし、単に生来の性質なのかもしれない。だが、レイチェルはずっと鎖で繋がれた生活をしてきたようなものだ。やっと解放されて今は右も左も不思議な世界にいる。しかし、それが楽しくて堪らないのだろう。過去の暗澹とした状況も吹き飛ばせるほどに。

「……君は、絵が好き？」

「大好きだよ。描き手の世界を覗けるから。どんな思いでそれを作ったのか、何を表現したかったのか、そういうことをあれこれ考えるのも楽しいし、解説を聞くのもいいもの」

笑顔を浮かべてレイチェルは答えた。アーサーはその笑顔を何度も見てきた。いつも読めない表情なのに、たまに見せる幼子のように無邪気で瞳の輝きが増している笑顔。

——だけど今は、今だけは駄目だ。やめてくれ。

また揺らいでいる、幼い自分の姿が。希望に満ちているあの子供が。アーサーの身体は急速に冷たく固まっていく。鼓動が痛いくらいに速くなり、感覚が麻痺していく。

レイチェルの話を聞けば聞くほど、自分の今までと重なるものが見えてくる。実際は全く違うのだろうけど、きっと昔の自分と同じ感情を抱いて生きてきたんだって。それなのにどこで間違えてしまったんだろう？ 彼女は誰かと関わるたびに警戒をしないのか？ 自分を表現することが怖くないのか？

——分かってるよ。僕の方が異常だ。こんなこと、普通は考えない。それでも、僕は——。

君が羨ましいよ、レイチェル。

「何かを表現するって本当に難しいこと。言葉にするのもそう。だからこそ、作品というのは素晴らしいものだと思う。それを観て感じたものも、自分の言葉で表現するのも」

「それならさ、自分の表現ってどうやって出していけばいいの？」

アーサーは震え声で尋ね始めた。レイチェルはいつも通り考えて、答えを口に出そうとした。しかし、今の彼はどこか様子が違う。その顔にいつもの余裕は無く、剥き出しの恐怖という本心が見えている。

「君は自分で表現する、ということをよく話に出すけれど、具体的にどうすればいいの？」

自分の考えや感情が否定されても貫き続けられればいい？ どれだけ意志を摘み取られても再出発をするべき？ 自分の本心は包み隠さず出していいものなのかな……」

アーサーは自分が何を言っているか分からなかった。明らかに混乱している。それでも言葉は止められない。

「君の言う表現、僕にはうまく想像できないよ。言葉に出来ないよ。それが出来たらこんな気分も晴れるのかな。でも、そんなのは遠い夢だ、ぼんやりしたままじゃ生きていけないんだって。そう言われ続けてきたんだ。君も分かるだろう。絵なんて生きるのに必要なんでないって言われていただろう？ 現に僕は、もう絵を描くことが出来なくなってしまったんだ！ もう君の楽しみ方を忘れてしまったんだ……」

「アーサー、待って」

レイチェルが冷静さを失ってしまったアーサーの顔を両手で包み込む。そして、じっと瞳と瞳を交わしあう。息を荒げたアーサーは目の前の瞳に凍り付く。青い瞳、かつているんなものに想像を膨らませた美しい瞳。

「落ち着いて、深呼吸をして。ゆっくり、そう、ゆっくり」

レイチェルの声に誘導され、アーサーは少しだけ落ち着きを取り戻し始めた。視界は微かに揺れ、足元もぐらつき、頭はズキズキと痛む。自分より小さな手が背中を撫でていることに気づき、ようやく張り詰めた意識が解れてきた。

「はあ、は、はあ……。ありがとう、助かったよ」

「気にしないで。苦しかったね。何か、私に出来ることは？」

アーサーは無言で首を振った。先ほどの自分の様子を思い出して、羞恥と焦燥と絶望と、様々な感情でごった返していた。レイチェルにほぼ八つ当たりのような言葉を浴びせてしまった。自分の昔を勝手に重ね合わせて、見当違いなことを言ってしまった。彼女の瞳が恐ろしかった。あの輝かしい青は自分の全てを見抜いているように思えて、あんなに惹かれていたのに今では恐くて仕方ない。『あなたが見ているのは私じゃない。あなたは誰を見ているの』そう問われているように感じた。

「アーサー、どこに行くの？」

「ごめん、ごめんね。今は君と一緒にいられない……」

一人にしてほしい、そう念じながらアーサーはレイチェルをその場に置いて行ってしまった。今にも泣きだしそうな顔で、倒れてしまいそうな足取りで。

レイチェルは彼の手を握って引き留めようとした。しかしその手は空を掴むだけ。追いかけることが出来ない。彼の状態は不安定で一人にするには危険だと感じた。でも今の自分は何が出来る？　ただ今は、自分の言葉がアーサーを深く傷つけたことがショックだった。

昔見た景色はよく覚えていない。薄っすらとした感覚だけが残っていて、現在にまで侵食してくるのが余計に恨めしい。姿は見えないのに聞こえてくる、あの声が。

小さなアパートに向かって走っていく。早く帰って描きたいな。何を、と聞かれても分からない。でも、てきとうに頭に浮かんだものを描くのは楽しい。どんな色を使おうか、どんな風に表してみようか、それを考えるのが楽しくて、すごく楽しくて。

父は五歳になった時いなくなった。手紙も残さずいってしまい、小さな写真だけが寂しく棚に飾られている。でも一つだけあるものを残してくれたことは知っている。新品の絵の具。まだ誰にも手を付けられていない鮮やかな十二色。父が絵を生業としていたというのは知っている。それ以外のことはよく分からないが、とにかく残してくれた絵の具を使って絵を描くことにすっかり浸ってしまった。

自分の部屋に籠り、時間を描くことに費やす。それが過去の楽しみであった。絵の具を出して、絵筆につけて、紙に思う存分滑らしていく。そしたら、そこにはきらきらした自分だけの世界が広がっている。話すことの苦手な自分が、自分を表現できるものが絵だった。

アーサーは満足げに紙を見つめる。こんなに素敵なものが描けたよ。見てみてよ、お父さん。

自分の名前が後ろから聞こえる気がする。母のやつれた目がこちらを見ている。ふと、アーサーが描いた絵に視線を下ろした。

『これ、あんたが描いたの？』

『あっ、そうだよ。これ、今日道で見た花で、お父さんの目にそっくりで……』

そこで、アーサーは咄嗟に口を押えた。母にとって父の話題はタブーのようなものだった。母は明らかに不機嫌な様子を見せた。大きなため息を吐いたその顔はぼやけて見えない。そのまま母は姿を消した。

お母さんはお父さんが嫌いなの？　昔はそんな疑問を抱いたわけだが、今なら母の気持ちも少しは理解できる。頼りを無くして、ある日突然子供と二人暮らし。ろくなものは残されていなかったから、暮らすのも精一杯。忙殺される毎日のなか、ずっと心は張り詰めていたのだろう。強がりの性格も災いして、誰にも助けを求めようとしなかった。自分だけで立派な一人息子を育てようとした。それがどこからか歪んでいった。

そんなある日、アーサーがいつも通り絵を描こうとしたとき、絵の具が見当たらないことに気づく。変なところに閉まってしまったのかな、まさか盗まれたわけじゃあるまいし。少し憂鬱だが、母に尋ねてみた。母はこちらを見ることもせず言い放った。

『全部捨てちゃったわ。あと、あんたが描いたものも』

啞然として、母に縋り付きその訳を聞く。何度も母の服の裾を掴んでいたら、限界を迎えたように今度は母が大声を上げてこちらを捲し立てた。ここからの記憶をはっきりとは覚えていない。何を言われて何をされていたか。それでも、言葉の断片は脳にこびりついた錆となり、確実にアーサーの心を縛り付ける呪いとなった。

『別にそんなことしなくてもいいじゃない』

『たかが絵なんだから、何にも……』

『こんなくだらないもの、生きるのに必要だと思うの？』

『あんたにはあいつみたいになって欲しくないの。分かるでしょ？』

『私の言うことだけ聞いて。私を不安にさせないで、ね』

「アーサー、アーサー！ おい、大丈夫か!？」

「あっ、はぁ……。あれ……。イーサン？」

「目が覚めたな……。よし、ゆっくり呼吸しろ。ゆっくりだからな」

イーサンがソファに横たわるアーサーを覗き込んだ。ひどい悪夢を見ていた。帰ってくるなりソファに倒れこんでしまい、イーサンが帰ってこなければもっと最悪なものを見せられたかもしれない。

「ああ、僕はまた……。なんで……」

「ああ、起き上がるな。まだ寝たままで大丈夫だ。とりあえず、何か欲しいものはあるか？」

「……水。ちょっと、菓飲むから」

アーサーは青ざめた顔のままだった。呼吸は少しずつ治まってはきているが、身体の悪寒、震えは止まる気配がない。ただひたすらに、昔の記憶が引き出されて耐え難い苦痛に襲われていた。

母は父がいなくなってから、息子のためと言い、しつくと称した虐待を行っていた。日常的に繰り返される暴力と母の精神的依存がアーサーを襲い、だんだんと恐怖が刷り込まれていく。それはイーサンの両親がアーサーを保護するまで続いた。母はその後どうなったか詳しくは知らない。気を遣ってなのか、会話をする際に母の話題が出ることも無かった。

しかし、アーサーは今まで受けてきた虐待の記憶を忘れてしまった。当時の思考、記憶、行動がどうだったか、消しゴムをかけるように忘却した。鮮明に残っているのは絵を描くことを否定されたこと、自分の意見を許されなかったこと、これから自分には自由なんか無いんじゃないかと予感したことだった。

よほどのことが起きなければ、この先母に会うことは無いだろう。それでも声は聞こえてくる。前まではもっと抑えられていたはずなのに、フラッシュバックしてしまうのだ。

「……はぁ」

どれほど時間が経ったか分からないが、アーサーはようやく普段の様子に戻ることが出来た。それもつかの間、あの時レイチェルをRストリートに置き去りにしてしまったことをようやく思い出した。アーサーは飛び起き、慌てた様子でイーサンに話しかける。

「レ、レイチェルのことを置いて、先に帰ってきちゃった。彼女、あそこで迷子になっ

ていたんだ。どうしよう、もしかしたら今……」

「心配すんな。レイチェルちゃんはちゃんと送り届けたからよ」

「え？」アーサーは予想外の返答にぼかんとした。

「同僚とRストリートに出かけていたときだ。そいつがゆらゆらと歩く女の子を見て『妹だ』って言いだしてさ。話しかけに行って、まあ状況は察したよ」

まさか俺のダチの妹だったなんてなあ、とイーサンは軽く笑う。そして、真面目な顔つきになりアーサーを落ち着かせるようにそのときのことを伝えた。

「レイチェルちゃん、お前ともう一度面と向かって話したいって言ってたぞ。そしたらもう二度と会わないからって」

「二度と……、二度と会わない？」

「とにかくそれだけ伝えてほしい、だそうだ。ああ、あとはゆっくり休んでくれとも」

レイチェルからの言葉には、透明な壁でもあるかのように距離を感じさせる。もう会いたくないと言われているように。そうした気まずさの原因も自分が作り出したものだというのに。目の前が滲んで、熱い雫が流れる。

「アーサー、……これはあの子自身が決めたことだ。状況を理解して、自分よりも相手のことを優先して考えることが出来る。優しい良い娘だな」

「……そう。彼女は本当に良い人だ。なのに、僕は距離を置いた。もっと仲良くできたら良かったのに。……レイチェルは悪くないよ。僕が勝手に過去の自分と重ねて苦しくなっただけ。これで彼女も僕から離れたくなったんだろうな」

鼻声のままぼつりぼつりと話す。レイチェルへの悔恨と未だ覚めぬ恐怖に頭はかき乱されたままだ。あることないことネガティブな推測をしてしまう。アーサーは再びソファに突っ伏した。涙を無理やり拭おうとして、かえって溢れて止まらなくなっている。

「どうすれば良かったのかなあ。ずっと、自分の考えを持っていて、それを表に出せて、真っすぐな彼女がすごく輝いて見えて……。昔、僕が絵を描いていたときもそうだったなあ。でも懐かしさより先に、『羨ましい』なんて感情が湧いた。ないものねだりだよ。僕はレイチェルを理解しようとしていなかった。きっとこれっぽっちも知ろうとなんてしていなかった……」

アーサーはようやくイーサンと目を合わせた。すっかり赤く腫れたまぶたが痛々しく生気を感じ取れない瞳だった。

「ここ最近ずっと、レイチェルを見ていると昔の自分が出てきて、懂ればその分だけあの人の声が聞こえてくる。昔とは違うって分かっているけど駄目なんだ。自分の表現とか、自分の感情を出すのも、人と関わるのも全部怖い……。ねえイーサン。僕はこれから、どうするべきだと思う？」

——もう、どうしようもないかな？

再び涙を潤ませて、アーサーは必死に答えを求めようとする。内心無駄な足掻きだと思いつみながら。

イーサンは始終真剣な表情でアーサーの告白を聞いていた。話し終えたことを確認すると、自分に問いかけられた質問への解に答える前に、まずは穏やかな顔を浮かべて、アーサーに向き合った。

「そうだな。まずは話してくれてありがとな。お前はいつも一人で抱えて自分を追い詰

めるからな……。ここまで重いものを背負ってよく頑張ってるよ、お前は」

ほんの少しむず痒い気分になった。イーサンの言葉の節々から感じる温かさに、ひどく安心感を覚える。

「確かに、何かを表現したり、自分の考えを持つってのはなかなか骨が折れる。言ってくる奴はとことん追い詰めてくるし、人間ってもんは面倒なのが常だ」

「うん、本当にそうなんだ……」

「だけどな、アーサー、一つ聞いておきたいことがある」

「何を？」 僅かに首を傾げてイーサンの方を見る。

「お前は、一度でも過去の自分がしたことを恨んだか？ 過去のお前が空想をしたり、絵を描いたりしたのは無駄なことだったと思うか？」

「え？」

アーサーにとってイーサンの疑問は全く持って意味が分からなかった。質問することも無いはずだ、答えは決まっている。

「そんなわけ、ないじゃないか！ 僕はずっと何かを想像したり、絵を描いたりすることが大好きだった！ 自分の感じたままを表現できることが堪らなく楽しくて……。大好きだったのに、僕は……」

もうやり方が分からないんだ。アーサーは思わず大声でイーサンの疑問に答えをぶつけた。恨むなんてそんなこと、考えたことも無かった。ずっと恋焦がれるように執着しているというのに。自己表現する方法が絵だった。しかし、それが出来なくなり、積極的な自分の出し方が分からなくなってしまったのだ。このせいで、余計に他者との関わりを築くのが困難になっている。

「ああ、そうだ。お前は何かを想像すること、絵を描くことが好きだ。自分の考えがあるし、前まではそれを表現する術も分かっていた。いや、今だってそれが分かっているはずだぜ。もう一度向き合うことが出来ればな」

「そんな。でも、どうやって？」

イーサンはアーサーの泣きすぎて赤くなっている目を逸らさず真っ直ぐと見つめる。

「な、何」

「アーサーはもう人に縛られることもないし、誰かの命令に強制されるいわれもない。他人を大事にする前に、まずは自分を大事にするんだな」

自分を大事にする。アーサーは目をぱちくりさせた。

「急ぎすぎなくていい。ゆっくり向き合っていけばいいんだ。今まであったことはお前のせいなんかじゃない。もし脳内でその声が聞こえてきても笑い飛ばしてやれ。そんな忠告で自分を変えることなんて出来ないぞってな！」

向き合うこと、アーサーがずっと怯えて出来なかったことだ。あの人の呪縛から逃れるなんて、そんなこと本当に出来るのだろうか？

「僕に出来ると思う？ 立ち向かうことが、あれを克服することが」

「出来るさ、その気になりさえすれば。生憎お前は一人じゃないんでね。何かあれば俺が話を聞いて協力してやるからな。勿論何もなくてもな。それに親父にお袋もいる。……あと、レイチェルちゃんも」

「あ……」

「そうそう、もう一つ言っておくと、あの子もお前と同じで人と関わるのは慣れていない
そうさ。未熟で右も左も分からないが、それでも懸命に努力しようとしている普通の女
の子だ。そんなレイチェルちゃんと同じくらいお前も良い感性を持つてるんだから、自
信を持て。大丈夫だ」

お前の絵、俺は好きだぜ。励ましと忠告。イーサンはずっと向き合い、明るくにこや
かな顔で見守っていた。アーサーの才を認め、背中を押して一步進むことを手助けして
くれる。今まで、しっかりと見てこなかったイーサンの姿だった。

——僕は今まで、彼のこともちゃんと見ようとしていなかったな……。

「……勝手に僕の絵を見ているとは思わなかったな」

「それは悪かった。いつも何かを描く音が部屋から聞こえているからよ。気になって見ち
まった。それぐらい、お前はまだ諦めていないってことだろ。良いことじゃねえか」

力強い返事に、アーサーは会話を開始してから初めて笑った。全てを納得できたわけ
じゃない。しかし気分はいくぶんか和らいだ。

「まあ今は無理すんな。ゆっくり休め。余計なことは考えず、安静にしてろよ。レイチェ
ルちゃんともいつか最後の別れをしなくちゃならねえが、今はまだその時じゃない。最
後に話すかどうかもお前次第だ」

そう、最後。次に会ったら、レイチェルとは二度と会えなくなるかもしれないのだ。本
当はまだ言い足りないことだらけなのに。

ずっと彼女の魅力に惹かれている。過去の想起とかそんなものは関係なく、もっとレ
イチェルを知るきっかけが欲しい。次で最後だなんて、そんなのはあんまりだ。彼女と
面と向かって話し合いたい。自分が過去と向き合うためにも。

「お前、本当はあれで最後きりになんてしたくないだろ？」

心を読んだのかというくらいの確に、イーサンは尋ねてきた。先ほどの表情から一転、
どこか揶揄うような仕草で。

「うん。まだレイチェルとしっかり話せていないから」

「すれ違って終わりだなんて、そんな悲しいことはないからな。そう決めたんならちゃん
と腹を割って話すんだ。俺は止めやしない。レイチェルちゃんに自分の気持ち、しっか
り伝えるんだぞ」

「うん。……いろいろとありがとう、イーサン」

激励のおかげか、今まで眠っていた活力がようやく目を覚ました気がした。アーサー
はあの青への恐怖心が少し溶けてきた。青い花が咲く姿を想像してみる。今度こそ散ら
さないように、またあの花を描けるように、再び祈った。

——心配ない。次はきっと笑えるよ、心から。

そう念じた途端、アーサーの携帯が鳴った。メッセージアプリの通知が届いた。レイ
チェルからのメッセージだった。

今日ごめんなさい。あなたに嫌なものを思い出させてしまった。

体調はどう？ もし具合が悪かったら無理をしないで休んで。ちゃんと安静にしてい
てね。

今までずっと、あなたに気を遣わせてしまっていたと思う。私のお守りばかりになっちゃって、あなたから時間を奪ってしまっていた。

だから次で会うのは最後にしたい。これはその方が良くと私が思ったこと。あなたは気に病む必要はない。けれど、最後は私たち本音で話せるようにしましょう。

もし、直接会うのが嫌なら手紙でもメッセージを送信しあうだけでもいい。あなたが負担にならない方を選択して。

いつでも待ってるから。

あれから二週間後、雨の中で二人は再会を果たした。お互いに青い傘を差して、大輪の花を咲かせているみたいだ。〇〇美術館の近くにある公園で落ち合ったものの、しばらくは見つめあうことも無く口を閉じていた。あんな別れ方をしてしまったのに、最初になんて声をかけたらいいのだろう。

気まずい流れを断ち切るように、「あの」とレイチェルは口を開いた。「この前は、本当にごめんなさい。あなたに思い出したくないものを思い出させてしまって……。何にも気づかずに私はあんなことを……」

「あ、謝らないで。あんなったのは元はと言えば僕が……」

そう言いかけてから、アーサーは黙ってしまった。レイチェルにどう伝えればいいのか考えあぐねていた。自分が今まで彼女に見出していたもの。すべてをしっかりと伝えきることをアーサーは望んでいた。その上で、もう一度彼女と交流できるように一歩進むことを。

「僕も君に一方的な感情をぶつけて、あの日一人で帰ってしまった。謝るのは僕も同じだよ。本当に、ごめんなさい」

互いに一定の距離を保ったまま頭を下げた。これ以上踏み込んではいけぬ暗黙の領域があるみたいに。雨のせいで立ちっぱなし、雨音の心地よい音すら二人を阻むものになっている。それでも会話を続けていかなければ。

「どうして、もう二度と僕に会わないって決めたの？」

「……あなたが、私を怖がっているように見えた」

落ち着いているが翳りのある声でレイチェルは言った。

「私が目を合わせようとすると、あなたはすぐに視線を逸らしてしまう。それに、あの時のあなたの顔はいつもみたいな顔じゃなくて、私を別の何かとして見ているようだった。……恐怖の対象として」

「えっと、ずっと気づいてた？　僕がその、君のことをどんな風に見ていたか」

「何となく、あなたは私を見ていないと感じていた。アーサーは表情に出やすい。あなたが思っているよりも」

そう言われて、アーサーは少し衝撃を受けた。今までしっかり笑っているつもりだったのだが、そこまで分かりやすく出していたなんて。イーサンもそんな風に言っていたことを思い出し、思わず苦笑した。

「全然隠し通せてなかったんだ～。はは、恥ずかし」

「そんなに落ち込まないで。アーサーにも事情があるのでしょう。それにね」

レイチェルは少しだけ前に進み、アーサーに一歩近づいた。傘が邪魔にならないよう

に持ち方を替えると、より表情が見えやすくなった。

「そんな怯えた顔だけじゃない。私が作品を観ながら何かを話すとき、あなたはいつも真剣に話を聞いてくれた。一言も拒絶せずずっと一緒にいてくれた。誰かと話すことが苦手、そんな雰囲気を持っていたけれど、あなたは私の感情を理解しようとしてくれた。それが嬉しかった」

ふとレイチェルは笑った。出会ったときに見せた、相変わらず読めない表情。その中には、感謝と寂寥が織り込まれていて複雑な表情だった。

「初めて会ったとき、私に付き合ってくれてありがとう。それからもたくさん話をしてくれて、いろんな場所についてきてくれて嬉しかったよ。だから、あなたには自分の過去を話してもいいと思ったの」

それが逆にあなたを傷つけてしまったけれど。どこか口惜しそうにレイチェルは視線を下げた。それから、アーサーに一縷の望みを賭けるように視線を合わせた。本当はまだ別れたくなんてないんだ、そう訴えかけるつもりで。

「僕のこと、嫌にならなかった？」

「まさか。私はもっと、アーサーのことを知ろうとすれば良かったと後悔してる。私だけはいやしてしまったから、もっとあなたと関わるべきだった。あなたが思っているよりも人と話すことや、何かを『表現』するなんてことに慣れていないの。私は、完璧じゃないから」

別れを惜しむ子供のような笑顔だった。レイチェルも右往左往迷いながら、人に慣れていこうと必死になりながら生きている。アーサーと同じように。

「お互いに不器用みたいだね、レイチェル」

「そうだね、笑っちゃうくらい」

アーサーもレイチェルの前に一步踏み出した。距離は縮まり、青い花が身を寄せ合っている様子にも見える。アーサーはようやく正面を向き、対話をする準備が出来た。

「レイチェル。もし君が申し訳なく思っているなら、僕に協力してほしいことがあるんだ。どうか、僕の過去について聞いてくれないか。僕が君にそうしたように」

「……あなたが話しても大丈夫なら全部聞く。それがあなたの助けになるなら私は協力するよ」

「ありがとう。いつまでも怯んでばかりじゃられないから、僕も自分のことに向き合わないと。そうしないと、レイチェルとしっかり話すことが出来ないから」

レイチェルの瞳を今度こそ見つめる。昔の自分のように純粹で素敵な彼女の瞳。

「僕は君のことが嫌いなんじゃない。もっと君のことが知りたい。今日で最後じゃなくて、ちゃんとレイチェルと話したい。そうするためには過去と和解する必要がある。自分の感情を整理するために、君に聞いてほしいんだ。ただ、聞いてくれるだけでいいから……」

自分の本音話す。自分の信頼する相手に話してみる。すっかり忘れてしまっていた感覚に、自分の思いがちゃんと伝わるか不安になった。

「私も、同じ気持ちだよ」

レイチェルは小さく囁いた。アーサーがやっと目を見て話してくれたこと、少しずつ歩み寄ろうとしていること。その全てを自分のことのように嬉しく思っていた。

「私もちゃんと話したい。まだ、あなたと一緒にいたい。アーサーと過ごす時間は新鮮で、私の知らない楽しみがあるの。これはきっと、あなたが私の友達だから」

「友達？」

「友達。私が初めて仲良くなりたいたいと、近付きたいと思った人。自分の記憶に向き合うのは時々ひどく辛いこともあるけれど、あなたはそれを選んだ。私に話してもいいと判断した。それだけでもすごいことなの。私を頼ってくれてありがとう」

今まで見た中でも一番優しい笑みを浮かべていた。レイチェルの言葉にアーサーも口元が綻ぶ。雨は長いこと降り注ぎ、傘に当たる軽快な音が響いている。それすら彼らにはもう関係のないことだ。二人は傘の中に籠る声を聴くために、確かに身を寄せ合った。

アーサーは時間をかけて、自分の過去のこと、彼女から見出だしていたものを含めてすべて話した。時折、当時の感覚が思い起こされ震える手を、レイチェルは遠慮がちに握った。アーサーが話している間、レイチェルは彼を安心させることに努め、言葉の全てを真摯に受け止めた。泣きそうな顔をした自分を優しく見つめ続ける姿に、アーサーは自分の幻影を見た。これで最後、幼い自分は今の自分を肯定し続ける。自己を表現する原動力となってくれる。どれだけ恐ろしくても、愛おしい代わりに無い存在だった。

話し終わるまでにどれくらい時間が経っただろうか。一度もどこかに移動することなく、公園の真ん中、雨が降り注ぐ中で話し合っていた。

「ごめん。結構長時間話しちゃったね。疲れたでしょ？」

「ううん。あなたが昔のことについて整理する時間を確保できて良かったと思う」

レイチェルはアーサーの手を握ったままそう言った。これはまだ初歩の段階だ。足を一步前へ踏み込んだに過ぎないが、アーサーの今までを考えればとても大きな一步だった。これからも時間はかかるが、彼が過去の出来事を振り返ることを前向きに捉え始めたのだから、きっと心配はいらない。

二人は公園から出て歩くことにした。これからも不定期に会うことを約束しながら、次はどんなことをしようか話す。美術館でもストリートでもどこへでも。何気ないこの瞬間の会話が二人には温かいかけがえのないものに思えた。

「いつかアーサーが描いた絵を見てみたいな、どんなものを描くの？」

「自分の頭に浮かんだもの。こうやって歩いている時に記憶に残った景色やものとかを描いたりすることが多いかな」

「なるほど。それじゃあ、素敵な場所に行けば、その分いろんなものをたくさん描けるのかもね」

「そう、だといいいけど。まずは完成出来るようにするのが先かな」

「ゆっくりでも大丈夫だよ。時間はあるのだから、あなたが思い描く世界を存分に描けばいいと思う」

そんな風に談笑をしながら歩いていた。傘を差しているため若干の距離がある。それでも、会話に集中している二人にはお互いの声がよく聴こえていた。今の二人にとって、これがちょうどいい距離感だった。

「アーサーの目、私の目の色と似ている。とても素敵」

「えっと、そうかな。君の目はとても綺麗だけど」

「本当だよ。宝石みたいな感じ。思わず独り占めしたくなるような、そんな感じ」

二人は視線を交し合ったまま、話を続けた。アーサーは見つめられすぎて気恥ずかしい思いだった。もう怖くはないが、レイチェルの美しい瞳に見られると熱に浮かされたように胸騒ぎがする。

「レイチェルの瞳も綺麗だよ。ゆったりとした海とかきらきら眩しい光源とか、いろいろ思い浮かぶけど、レイチェルの瞳は大輪の花みたいに鮮やかで明るく見える。すごく目を引いて、離れられなくなるんだ。そう、君の瞳が好きだ」

正直で率直な感想。脳内に浮かぶのは青い花。レイチェルに抱いている思慕の感情をようやく言葉に出して言えた。自分の思うままを口にして表現することが久々にできたのだ。

「ありがとう。何だかそんな風に言われたのは初めて。真っ直ぐに刺さってきて、アーサー、貴方の表現とても好き」

その言葉だけでも、アーサーにとっては報われた心地がした。レイチェルが与えてくれた自信は、ようやく自分らしさを取り戻す鍵となってくれた。

「君には感謝してもしきれないな。イーサンにも礼を言い足りないくらいだし。僕は助けられっぱなしだ。本当にありがとう」

「私もいろんな人に助けられている。そう、あなたの家族にも。だから私にもお礼を言わせて。ありがとう。これからもあなたが表現する世界を楽しみにしてる」

二人は互いを称え、またありきたりな会話を続けていく。異なるようで同じような感性と性質。青い花を濡らしながら、似た者同士の二人は歩き続けた。今度はお互いが向き合えますように。

肉薄 / 渡邊望生

肉薄 / 渡邊望生

肉薄

一

しおりは、もう随分長い時間私の瞳を覗き込んでいた。私はその動作で、彼女が今とは違っていた頃のことを思い出した。ねねは目が真っ黒だ、あたしが全然見えないよ、そう言って乾いた私の頬をつつく。最早思い出すこともなくなった頃の記憶が、少しだけ胸を温かくする。そしてその後で、過去を懐かしんだことをひどく恥ずかしいことのように、罪深いことのように感じるのだ。

二

「しおり？」

階段を上り奥の部屋の前で立ち止まる。返答はない。空いた左手でこの家で一番広い部屋の扉を押し開けると、独特な臭いが鼻をついた。部屋は奥の方までずっと広く、闇は四隅に溜まっている。窓から注ぎ込む月の光がどこか不自然に床の一部を切り取っていた。ここではあらゆる空気がうねるような形で堆積している。

「あああ、あ、ねえ」

「ごめんね」

私は奥の人影に向かって声を掛ける。獣が人の気配に反応するように、その影はもぞもぞと動く。絡まった髪とシャツがゆらめきながら作る影だった。色素の薄い目がぎょろりと動いて私の方を見る。ふっくらとした頬には唾液がこびり付いている。私が近づいて行くと、彼女は私という存在そのものを拒否するように腕を振り上げた。

三

夜がまた一つ深くなった。僅かに注ぐ月の光が窓の縁に溜まっていた。

しおりはひどく曖昧な目つきをして天井を見ていた。いつも、ある一定の時間になると彼女は喋らなくなる。諦めたように身体を投げ出し、私に対する抵抗を止める。先ほどの彼女が嘘のように、完全に口を閉ざして、遠い所に行ってしまうのだ。

私は目の前に横たわっている彼女の身体を起こし、服のボタンを上から外していった。ぱらぱらと紙が剥がれて行くように彼女の服はベッドの上に落ちた。私は部屋の隅の手洗い場でタオルを絞り、彼女の身体を拭う。

薄闇の中で、彼女の裸身はその曲線に石膏像のような影をたたえている。その顔からは羞恥も屈辱も読み取ることが出来ない。乾いた皮膚に覆われた腹も、そのさらに奥に眠っている性器も、本来私なんかの手によって外界に晒されるべきものではなかった。美しく生々しく、秘匿されるべきもの。私は空いた方の手でしおりの腹の辺りをまさぐってみた。動かなくなってから、彼女は大分太ってしまった。かつての姿からは想像も出来ないぶよぶよした脂肪がそこにこびり付いて、弓なりにあせもが出来ている。私は何となくそれを直視してはいけないような気がして、目を逸らした。

四

「卑怯だ！」

私は、しおりを愛していると言った、彼女を犯そうとした男を前に叫んだ。その肩を掴んで揺さぶった。ただただ悔しかったのだ。その愛も行為も揺るぎないことが。私の指は男の胸元を引っ搔くように滑り落ちて行く。人前で涙を流したことなく、初めてかもしれない。

涙には音というものはなく、拭わなければこぼれ落ちて行くだけだった。男はその後、夜が明けるのを待たずして家を出て行った。

五

「しおり」

私は呼びかける。その言葉だけが、私たちの間で行き場を失っている。彼女は物音に反応して目を覚ましたらしい。

私はそのベッドに上り、彼女の身体を強く抱きしめた。腕に力を込めてみる。私の腕から逃れた脂肪は弾けそうなほど硬く膨らむ。間近にある顔が次第に赤くなっていく。雪が辺りを覆い尽くして、私たちは世界から離れた所に取り残される。しおりが声を上げる。

彼女を愛していると言った男の迷いのない目は、すぐそこにあって、私を見つめていた。だから私は、考えるより先に愛してると口にした。

めらめら / 高瀬静

めらめら / 高瀬静

めらめら

高瀬 静

日暮れが町を侵していた。閉じられた鎧戸の群れと、木乃伊色の看板とが、人影残る往来を出鱈目に縁取っていた。往く人々の、泥濘で溺れる蛙の足取りは、町に一つの情調を齎していた。戸塚は胃の腑を震わせた。さっさと遣いを済ませて帰ろう、と、戸塚は思った。

伊佐氏の住まいは往来の最果ての更に先、緩やかな坂の上にある。大抵の若者であれば、それほど苦しい道程ではない。しかし、生来出不精であるうえ、伊佐氏に届ける数冊の古本を抱えていた戸塚には、あまりに長い道程であった。近隣に民家はない。また、街灯もない。あるのは深い暗闇と砂利道ばかりである。ようやく氏の邸宅に到着する頃には、戸塚の顔面は完全に色を失っていた。和洋折衷、ハイカラな文化住宅とでもいべき豪邸の前に立つ、そんな自分の姿が、戸塚には一層みすぼらしく、みっともなく思えた。多少の逆恨みを込めて、純白の壁や色硝子、石畳、見たこともない花々が並ぶ庭に目を走らせ、幸福の気配の少ない家だ、と、戸塚は思った。袖口で額を拭い、息を整え、口腔内の鉄味が薄まってから、戸塚は呼び鈴を鳴らした。

引き戸が少し開き、大きな塑像が顔を覗かせた。目を開いたまま寝ているような塑像であった。この顔はきっと未来永劫、何の色味も示さないのだろう、と、戸塚は直感した。

「はい」

重たい声。色が見えない声。

「あ、あ、あの、古書屋の遣いで参りました。戸塚です」

宙を泳ぐ、戸塚の視線。

「ああ、戸塚さんね。はい、はい。話は聞いているよ」

「こ、これ、本、お届け物です」

戸塚は、ひとまとめになった古本を突き出した。本を包んでいる藁半紙が、戸塚の手汗により湿り気を帯びていた。塑像はそれに見向きもせずと言った。

「疲れただろう。お茶でも飲んでいきなさい」

「は、いえ、そ、そんなお気遣いなさらず」

恐縮ではなかった。戸塚は、一刻も早くこの家を立ち去りたかった。この男の前から、立ち去りたかった。その追われる兎のような切実さは、確かに伝わっていたのである。しかし、それでもなお、塑像は頑なに、戸塚を招き入れようとした。戸塚に、その誘いを固辞できるほどの胆力は無かった。

「遠慮しないで。さ、上がりなさい。ほら」
「いえ、あの、は、え、では失礼します」
そして、伊佐邸が戸塚を飲み込んだ。

燬

戸塚は、玄関から廊下を三十歩ほど進んだ先の和室に通された。ふすまで囲まれたその部屋には、座布団と机だけが置かれていた。応接間にしてはみすぼらしいな、と、戸塚は思った。塑像は戸塚を座らせると「茶を淹れてくる」とだけ言って、出て行ってしまった。あれが伊佐だろうな、と、戸塚は思った。

古書屋の店主いわく、伊佐氏は奥方と二人暮らしであるらしい。だから、戸塚はてっきり奥方が出迎えるものだと思っていた。伊佐夫人、といえば町で知らない者はいない。そしてまた、伊佐夫人を実際に見た者もない。本屋が、酒屋が、豆腐屋が、あるいは、蜘蛛が、狸が、蟒蛇が、誰もが、『あの人は大層な器量好らしい』と、まことしやかに囁き、誰もが、『一度はこの目で拝んでみたいものだ』と、胸を焦がす。えてして噂とは、具体性がない時にこそ鮮やかに燃え上がり、妖しく輝き、人々を魅了するものだ。かの美しき伊佐夫人の噂は、最早ある種の怪談のように語られていた。怠け者で、日の光よりも電灯の輝きを愛する戸塚が、わざわざこの面倒な遣いを引き受けたのは、そんな伊佐夫人を一目見ることができるのではないかと、淡い期待を抱いていたからであった。しかし、戸塚の期待は裏切られた。今となってはもう、机に施された精緻な意匠を眺めて、時間が過ぎ去るのを待つだけであった。

ふと、声が聞こえた。丁度戸塚の背後、ふすまの向こうからであった。錆びついた鈴のような、弱弱しく、切実な声。垂っ——垂っ——と。何度も。何度も。伊佐氏を呼んでいるのだろうか。戸塚の心臓が熱を帯びる。戸塚はこの熱を知っている。

氏は来ない。呼び声は止まない。仮に、声の主が助けを求めているのだとしたら……なにかが手遅れになる前に助けなくてはいけないだろう……ふすまを開けなくてはならないだろう……それは合理的な判断で……道徳的な判断で……。なんて。

戸塚は何も考えなかった。脊髄に刻まれた本能、いわば生理的な作用により、否応なく、ふすまを開けさせられたのであった。

仄暗い、広い部屋。茫々とした部屋。その中心に『揺らぎ』が横たわっていた。
「何してる」

背後から重たい声が聞こえた。

燬々

「勝手に入るのは感心しないな、戸塚さん」

やはり、その声には色が無かった。氏は『揺らぎ』、もとい伊佐夫人の身体を起こし、その小さな唇を茶で湿らせた。細い咽喉が脈打つ。戸塚は妙な気分になった。

「身重なんだ」

「はあ」

「悪阻がひどくてね。もう臨月だというのに一向に体調が落ち着かない」

氏はまた夫人を横たえた。なるほど、夫人の顔は月のように青く、石のように白い。ほとんど死体のようですらあった。しかし、戸塚には、うすらと開かれた夫人の目の奥に、瘦弱な肢体に似合わない、無邪気な輝きがあるように見えた。それが、なんとも不恰好で、不釣り合いで、気色悪かった。

夫人の枕もとにしゃがみこんでいる伊佐氏は、小さな声で言った。

「本当は、私がつきっきりで看病したいところだが、色々あってね。なかなか難しい。だから、あなたには、これと、生まれてくる子の面倒を見てもらいたい」

「え、あ。ま、まさか、初めからその、つもりで……」

「そうだよ。いつだったか、あなたのことを古本屋で見かけてね。うちに来させるよう、店主に頼んでおいたんだ」

「……め、面倒なら、い、医者にも、助産師にも、見させたらいいじゃ、ないですか、ね」

「みせられない。わかるだろう」

戸塚は夫人を見た。その咽喉を、貌を、目を、下腹部の異様な膨らみを。揺らぐ夫人の輪郭と、溶け出しつつあるその意味を。夫人の口元がにたり、と、歪んだように見えた。戸塚の心臓が、再び熱を帯びた。そして、戸塚は、夫人の姿を誰も見たことがない理由を理解した。ああ、きっと、伊佐氏が、身重になるずっと前から、この夫人を、部屋に閉じ込めておいたのだ。たしかに、こんな生き物、医者にも助産師にも、この世のどんな人間にもみせられない、と、戸塚は思った。だからこそ、戸塚は不思議だった。

「な、なぜ、わた、自分なんですか」

伊佐氏は立ち上がって、戸塚を真正面に見据えながら言った。氏と戸塚の目が合ったのは、これが初めてだった。

「あなたが、弱いからだ。弱くて、暗くて、若いからだ。きっと、この魔力にも耐えられるだろうと思った」

魔力。言えて妙だ、と、戸塚は思った。目の前に横たわる生き物がまとっている、あるいは、かつてまとっていたこの雰囲気形容するならば、魔力という言葉が相応しい。それは幽かなようで明確な、素手では触れられないような、生まれたての稚児に似た魔力である。戸塚は、このちんけな魔力にあてられた人々を想像した。哀れな『大人たち』を。

「礼はする。必要なものがあれば、何でもすぐに用意しよう」

「……考えさせてください」

「いやだめだ。今すぐ決めなさい」

もう時間がない、と、伊佐氏が言った瞬間、夫人が声をあげた。

燦々燦

吁——吁——と夫人の声が、暗い和室を木霊する。

「どうする」

「え、あ、え」

吁——吁——と夫人の声が、どんどん大きくなっていく。

「どうする」

「その、え、う」

吁——吁——と夫人の声は、ほとんど絶叫になっていた。

「どうする」

「う、うう」

吁——吁——。

「わ、わかりました！」

燉々燉々

和室が、俄に明るくなった。戸塚も、伊佐氏も、夫人の方を見た。夫人の下腹部が小さくなっていた。うまれたのだ。

「生まれた」

「う、産まれた……」

子は、赤い火に包まれていた。否。絶叫の間隙で、産声の代わりに火花を散らす。

それは、まさに、火そのものであった。

「へえ。こんなのが生まれるのか」

相変わらずの声で、氏は平然と言った。夫人の絶叫は、未だやまない。このままでは、夫人にまで火が移ってしまう。戸塚は、夫人を、燃え盛る子から引きはがした。夫人の下腹部は真っ赤に燃えただれていた。

「え、え」

狼狽える戸塚に氏は言う。

「あなた、確かに引き受けてくれたね」

「え、これ」

「これとあれ、一緒にはおいておけないな。しかたない。あなたは、あれの面倒を見てくれ」

氏は子を指さした。

「これの面倒は、まあ、うん。私が見よう。この火傷じゃ、もってもせいぜい十数日だろう」

「は」

「あなたの部屋は隣に用意してある。じゃ、頼んだよ」

そう言って、氏は、上がり切った咽喉で、なお叫び続ける夫人を引き摺って、どこかに行ってしまった。あとには、燃える子と、戸塚だけが残された。呆然とした脳の裏側に、戸塚は、最後の夫人の姿を映してみた。夫人は輪郭も、魔力も、輝きも失い、ひどくつまらなくなっただけに見えた。すると、あの目の輝きは、胎内の子の火種だったのか、と、戸塚は考えた。

子は、めらめらと燃えていた。

燬々燬々燬

伊佐は子に名をつけていない。つける気もないだろう。薄情な人だと思う。とりあえず火と呼ぶことにする。引き受けてしまったものはしかたない。しばらく子守をしてみようと思う。伊佐が用意した部屋は広い。窓がある。手入れされた庭が見える。布団がある。下着がある。服がある。厠もお風呂も近くにある。本がある。紙がある。要望があればこれに書いて外に張り出しておけばいいらしい。万年筆がある。高価そうだ。しばらく退屈はしない。時々所感を書き連ねていこう。

火は熱い。触れられない。近づけない。火鉢に刺さった箸で転がして布団に乗せた。布団は燃え尽きた。畳も燃えつつある。いずれ部屋ごと燃えるだろう。火を持ち上げて火鉢に乗せた。小さくて助かった。

物品を取り寄せた。すぐに届いた。伊佐の姿は見えなかった。不気味。この状況よりは愉快だけど。火に関する物品だけ記す。子育て本。おしめ。粉ミルク。おしめ。履かせ方を考えていなかった。不可能だった。あれだけ燃えていれば風邪をひくこともないだろう。ミルクを作った。お湯が必要。ひには困らない。葉缶とお水がない。わざわざ紙を張り出すのが面倒くさい。試しに叫んでみる。

届いた。伊佐はずっと聞いているのだろうか。見ているのだろうか。不気味。飲ませ方を考えていなかった。振りかけたが蒸発した。飲んだ様子はない。火は産まれてから何も口にしていない。離乳食を試してみよう。

届いた。もうわざわざ紙に書く必要もない。楽。不気味。投げしてみたけど燃えるだけ。箸を使って近づけてみたけど焦げるだけ。食べた様子はない。おなかが空いていないのだろうか。暫く待ってみる。

火は眩しい。表情が分からない。顔あるのかさえも分からないけど。声も聞こえない。火の感情を知るすべがない。感情があるのかさえも分からないけど。燃え続けている。生きてはいるのだろうか。心臓があるのかは知らないけど。

暫く経った。煮詰めた野菜等を取り寄せた。食べた様子はない。そもそも火に食事は必要なのだろうか。薪でもくべてみるか。

試しに古本をくべた。灰も残さず消えた。食べたらしい。よかった。包装の藁半紙をくべた。焦げるばかり。食べない。

百科事典・不
新聞紙・食 古
紙・不 未記述
植物図鑑・食 古
歴史小説・食 古
新聞紙・不 新

朝夕二回食事が出るらしい。味は普通。

薪・不
落ち葉・不
石炭・不
木炭・不
着火剤・不
油・不

火が大きくなっている気がする。洗濯物は出しておけばよいらしい。楽。不愉快。気色が悪い。

写真・食
恋愛小説・食 新
推理小説・不 新
メモ用紙 記述済・食

火の食事の好みが変わってきた。古いもの念がこもったものを食べるらしい。手紙等も食べるかもしれない。

夫人はどうしたかな。

排泄はしないのだろうか。

燂々燂々燂々

子が食事を覚えた頃、戸塚の部屋の前に一通の手紙が置かれていた。上質な白い封筒であった。詳しい宛先はなく、ただ『おまえへ』とだけ書かれていた。戸塚はなんとなく、夫人に宛てたものであると思った。戸塚は丁度、手紙の類を欲していたのだった。そっと、戸塚は、その手紙を懐におさめた。

封は切られていなかった。夫人も、無論伊佐氏も読んでいないらしい。そのことが、些かなりとも戸塚の良心を刺したが、しかし、ここまで持ってきておいて、今更元に戻すのも、戸塚には憚られた。戸塚は、意を決して封を切った。丁寧に畳まれた手紙が一枚だけ入っていた。達筆であったが、それが戸塚には、妙に鼻についた。

燂々燂々燂々燂

庭の木が今年も実を付けた。お前に差送ってやろうとも思ったが、私はお前の住居を知らない。私はもうお前に果物すら送れないのだと思うと悲しくてならない。

戻ってこい。戯れにもいい加減気が済んだであろう。お前のようなものが生きていける道理はどこにもない。落伍した者に待つ艱難辛苦、懊惱焦慮、思い知ったはずだ。態々荆棘の道に甘んじる必要もないであろう。お前のいる地獄を想像する度に、私は身を焼かれるような心持になる。今ならまだお前の席を戻してやることもできなくはない。腕の良い医者も紹介してやろう。しかし恩情にも限界がある。これ以上然様な愚挙を続けるならば、今度は、私自身の手によってお前を焼くことも厭わない。

悪いことは言わない。戻ってこい。やり直せ。私はお前を愛している。

追伸 見つけたぞ

燂々燂々燂々燂々

手紙・食

火が大きくなった気がする。

燂々燂々燂々燂々燂

また、手紙が置かれていた。宛名はない、差出人も書かれていない、封筒にさえ入っていない、手紙というより書き損じのような紙切れであった。しかし、やはり戸塚はそれが夫人に宛てられたものであることを直感した。紙面にのたうつ悪筆に、戸塚は、果てしない怒りが脈打っているように感じた。

燂々燂々燂々燂々燂々

モえてしまえ、キ様はモえてしまえ、ふざけやがつて、ずっとバカにしてたんだろ、モえてしまえ、ヘンな目でみやがつて、オレの気を知つてやがつたくせに、なんもかんも知つてやがつたくせに、モえてしまえ、モえてしまえ、酒も金もかえしやがれ、チョウ子のりやがつて、うそつきやがつて、モえてしまえ、モえてしまえ、くるしみやがれ、モえてしまえ、アイツとモロトモにモえてしまえ。

燬々燬々燬々燬々燬々燬

手紙・食

よく燃えた。

燬々燬々燬々燬々燬々燬々

また、手紙が置かれていた。今度は、花の香りのする便せんに入れられていた。戸塚はやはり、夫人に宛てたものであると直感した。

燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬

あなたとお別れしてから、明かした夜を数えてみますと、途方もない気持ちになります。その後、いかがお過ごしでしょうか。

私は、例の片田舎の農村にて、忙しく生活しております。近頃は坊やが言葉を覚え始めて、おうちが少し騒がしくなりました。学生時代の、静かな日々が懐かしく思い出されます。そちらの生活は、きっと優雅で、さぞ悠々としていらっしゃるのでしょうか。うらやましい限りです。

さて、あなたのもとにも一つの幸せが舞い降りたことを、風の便りに聞き及びました。この度は、大変おめでとう。解語の花、深窓の佳人と呼ばれたあなたも、やはり人間でしたのね。私はなんだか、あなたに親しみを覚えてしまいました。カンニンしてね。(この言葉も久しぶりに使いましたわ。先生どうしているかしら)。本当は直接お祝いをして差し上げたいのだけれど、もうしばらくはそちらに行けそうもないのです。このお手紙をもってお祝いとさせていただきます。どうかご無礼をお許してください。

無事を祈っております。お体に気を付けて。あまり火遊びしないでね。

燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬

手紙・食

燃やすと悪臭。ドブのよう。

燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬

子は大きく、そして強くなっていき、決して低くはない天井を焦がすまでになっていた。火箸を介しても手を焼くから、戸塚は子に近づけなくなった。戸塚は、そのことに、多少の寂しさを感じた自分に驚いた。戸塚にとって、今やこの燃える子は、生活の全てになりつつあった。

子は、なかなか美食家であった。初めは古新聞もカストリ雑誌も百科事典も、区別なく食べていたが、戸塚が子に傾倒するにつれ、選り好みをするようになった。より詳細に言うならば、ものに込められている念の質を選ぶようになった。単に、長く人の手元にあったという程度では満足しなかった。より深く、醜い念である必要があった。つまるところ、いわくつきの物品を好んだのである。しかし、そのようなもの、いかに伊佐氏といえども、そうやすやすと手に入るものではない。戸塚が求めても、部屋の前に置かれないことが増えた。

戸塚は頭を抱えた。餓え、などという概念が子にあるのはわからなかったが、戸塚にとって、子に何も与えられないという状況は、耐えがたいものがあった。だから、時々届く夫人宛てらしき書簡は、大いに戸塚を喜ばせた。

そのような折、戸塚は、部屋の前に皴のついた茶封筒が置いてあるのを見つけた。分厚く、持つとずっしり重たかった。表には一文字、『祝』とだけ書かれていた。封を開けてみるとそれは、現金の束だった。海の向こう、星の裏側まで渡れるほどの額だった。これも夫人宛てだろう、と、戸塚は思った。一瞬、戸塚の、軽薄な欲望がざわついたが、すぐに落ち着いた。考えてみれば、今の戸塚に金を使うような機会はなかった。この家において、紙幣は単なる紙切れであった。

燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬

現金・食

火が鉢からはみ出した。乗せるための鉄板を取り寄せた。鉄なら燃えないだろう。

燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬

初めて、紙でないものが届いた。やはり夫人宛てであろう、と、戸塚は考えた。笹の葉でくるまれたそれは、さながら異臭のする泥であった。おそらくかつては握り飯であったのだろうが、こうなってしまうとは、最早食べ物ではないな、と、考え、戸塚は、それを子へと投げ入れた。子は手紙を投げ入れたときのように激しく燃え上がった。

燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬々

おにぎり・食

燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬々

反物が届いた。指輪が届いた。手鏡が届いた。本が届いた。刀が届いた。桐箱が届いた。果物が届いた。木が届いた。ハンカチが届いた。小鳥が届いた。それらはすべて、同時に届いた。戸塚には、差出人も同じであるように思えた。おとぎ話のようだ、と、戸塚は思った。勿論、夫人宛てであった。戸塚は投げ入れた。子は、やはり激しく燃え上がった。

燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬々

やめた。

燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬々

花が、一輪届いた。まだ土がついていた。不器用にむしられた跡があった。まだ、誰かの体温が残っていた。戸塚は投げ入れた。

燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬々燬々

「ご苦労様」

戸塚の部屋に伊佐氏が現れた。

「丁度さっきあれが死んだよ。で、あの子の様子はどうだ」

戸塚の返答を待つことなく、氏は、子がいる部屋のふすまを開けた。

刹那、二人の視界が真っ赤に染まった。子は既に、部屋を覆いつくすほどに延焼していた。鉄板は解け、その下に家の基礎らしきものが露出していた。天井は焼け落ち、屋根の色が見えつつあった。

「ふむ。なんだ、こんなものか」

伊佐氏は懐からピストルを出し、戸塚に渡した。

「さすがに家が焼けると困る。殺しておいてくれ」

「え」

「なんだ、できないのか。なら私がやる」

ピストルを取り返そうとする伊佐氏の手を、戸塚は払いのけた。

「あ」

「やるなら早くしてくれ。そろそろ家がもたない」

「え」

戸塚は狙いを定めた。火の中心。そこに子がいることを戸塚は知っていた。銃口が震えていた。

「ピストルの撃ち方くらい分かるだろう。ほら、そのまま引き金を引くんだ。ほら」

戸塚は考えていた。なぜ子は燃えたのだろうか、と。なぜ、夫人は死んだのだろうか、と。わかるはずもなかった。わかりたくもなかった。しかし、いずれわかることだった。戸塚はそこに、なにか、嫌なものが待っているような気がした。醜くて、臭くて、重たくて、熱くて、酷いものが。それは、あの時、子を捕えたものであり、あの日、夫人を汚したものであり、いつか戸塚を飲み込むものであった。ふと、戸塚は、子をそれから逃がしてやりたくなった。

そして、引き金を引いた。

燬

朝焼けが町を侵していた。閉じられた鎧戸の群れと、骨色の看板が、人影の無い往来を出鱈目に縁取っていた。悠々と歩く戸塚の、水槽を泳ぐ金魚の足取りは、町に奇怪な色彩を齎していた。戸塚は口角を歪ませた。さっさと呪いを振りまいて逃げよう、と、戸塚は思った。

星墜の海 / 今泉とびら

星墜の海 / 今泉とびら

星墜の海

今泉とびら

水で覆われた銀世界を、塩でできた錆色の線が走る。空を見上げずとも視界に入る大きな、白と黄褐色で彩られた縞模様の球は、今日も瞳のような大赤斑を携え、宇宙の闇に埋もれている。それと、運が良ければ三つの大きな衛星が見えるだろう。

そんな変わり映えのしない荒野の景色に、ぽっかりと空いた穴がある。その下には、旧人類が夢見た世界があり……

そこにはやはり、変わり映えのしない「海」が広がっているのだ。

エウロパの海には二頭のクジラが沈んでいる。と言っても、もう原型を留めてはいないのだが。

クジラはこの「海」では生きていくことが許されなかった。プランクトンの量が十分でなかったのだ。一つの命として旧人類が知る最も大きいものであるクジラは、故に、最も多くの犠牲を糧に生きることになる。一方で、その排泄物や死骸も、多くの生命の糧となる。

エウロパにクジラがいるのは、地球の生命に重大な危機が訪れていたためであった。もはや地球はどんな生命も住むことが不可能な灼熱の星と化そうとしていた。生き延びるためには他の星に移り住むしかない。新人類にとっては星間移動など慣れたものであったが、地球の他の生命たちはそうもいかない。ということで、今度の裁きは洪水ではなかったのだが、動物たちのために星間移動が可能な箱舟が作られたのだ。箱舟には、旧人類の時代から存在し、新人類にも親しまれてきた動物のつがいたちが乗せられていた。というのも、人類の技術が発展しすぎた結果、「環境保護過剰」が起こり、進化が妨げられ、生命は長らくその姿を保つようになったのだ。植物たちや微生物たちはというと、人類と動物たちの快適な入植のために一足先にエウロパに移っていた。しかし、地球がいくら温まろうと、未だエウロパは寒すぎた。氷の大地に植物は根付かず、地上の動物たちはそう多くは生き延びることができなかった。結果的に、「海」だけが地球の面影を移して今日がある。

クジラは生き延びることができなかったものの、その死骸は海底に豊かな生態系を作り、それは森の如く形を変え、街さえ築いたのだ。街の主はタコたちだった。タコは地球にいたころからしばしば街を作っていたから、そう不思議なことでもない。食糧が豊富かつ平坦な地形が多い「海」の森に適合した結果だろう。隠れ家となるような巣を自ら形成していき、何世代にも渡って住み着いてきたのだ。

とは言え、タコは一回の産卵で十万から二十万(この数は、オスのタコに養育行動の発生したのに伴い、幾らか減少したようにも思われる)の卵を産むため、オスのタコたちは早くに生まれた数匹の子どもだけを引き取って街で育てている。

タコたちの学校ではこう習う。

クジラは生命の源です。クジラというのは幻の動物ではありませんよ。イルカやサメなどよりも大きな動物で、この「海」では生き延びられませんでした。死して安全な私たちの森を育んだのです。ですから、子どものうちには森の外に出るはなりませんよ。特に、「天」

(旧人類の言う海面)の近くには近づかないこと。死者の領域ですからね。

タコたちの街は石畳をなぞるように広がったが、決して森の外に出ることはなかった。食糧が豊富なエリアでしか固着性を見せないという事情のみならず、そこにはタコたちの迷信じみた直感があったのかも知れない。

永遠を生きる新人類は、もはや生殖無しに種を存続できるという特性からか、持ち前の反出生主義を拗らせ、その対象を他の生命にも向け始めた。そこでとった選択が、他の種にも自死や生殖拒否を選択させることだった。それも、賢い生命から。その対象は、はじめはしつげのできる経済動物や愛玩動物、カラスやハト、オウムのような一部の鳥類、そしてクジラやイルカ、タコのような海の生物だった。もう新人類には家畜は必要なかった。食事の全ては完全な人工物で補われていた。そうでなくても、例えば肉を欲したとき、ほんの僅かな筋繊維から1kgのステーキを作り出すくらいのはわけもなく、DNAから生物を再現することすら可能だった。現存する生命のうち人類が発見したものは皆、再現可能な状態にあった。新人類が生命を生かしておくのは純粋に倫理的問題からであることになったのだ。その倫理的問題から、新人類は生命の絶滅を望んだ。

方法としては、「知恵の実」を利用することにしていた。「知恵の実」により一夜にして過剰な知恵を与えることで、動物たちは行動の全てを逡巡し、意欲を減退させられる。「知恵の実」の副作用として、動物たちの「文明化」があったが、新人類はそれを危惧しなかった。新人類は自らの超越的な技術力が越されることなど、想像もしなかった。その点で新人類が警戒するものはただ一つ、他の恒星系の知的生命体であった。

この「知恵の実」計画を地球規模で生命に実施するのは流石の新人類にとっても骨が折れるものであったが、「箱舟」計画以後となると事態は単純であった。エウロパに運ばれた生命は人類により選別されたという大前提がある。箱舟に乗せられた一定の大きさを持った動物たちは、総じて「知恵の実」を与えられた。

それでも、現在まで生命が命を繋いできたように、次の世代を生むことを選択することはあったのだ。

とある一匹のオスのタコは、このご時世には珍しく、愛する妻との交接を決断した。出産を終えたメスが卵を守って衰弱死することは、人間に知恵を与えられずともタコの間にも知られた常識であった。だからタコは、自分が食糧を持って行ってやれば、妻の

死は免れるだろうと考えていた。

しかし、タコの安直な読みは外れた。食糧は墨を吐かれて拒絶された。視柄腺の作用を知恵による合理的判断は上回れなかった。錯乱したタコの妻はストレスからか自らの腕を噛みちぎって死んだ。

すぐにも、タコの妻の葬式が行われた。タコたちのなきがらの葬り方は、旧人類が天燈を上げるようなものであった。なきがらはクラゲが発光する原理を用いて光る浮きをつけられて、「星」になるのだ。これは、サカナが死ぬと浮かんでゆくのに倣ったものらしかったが、タコは妻の遺体にいつまでも縋りついていたい思いで、その手順を恨めしく感じた。

タコは自分の無力を知った。十万の子どもたちのほとんどはもう街の外に旅立っていたから、タコは数匹の子どもたちを全力で守ろうと決意した。

タコの妻が残したものは子どもたちだけではなかった。タコの家にはクラゲがいた。タコたちの青くて濃い血液は、クラゲには流れていなかった。しかし、クラゲはタコの家族と代々共存してきた生命であった。クラゲは言葉を持たなかったし、ともすれば見失いそうなほど小さかったが、タコによくついて回るので、かわいがられた。クラゲはタコに時折食糧を分け与えられ、ともに生きてきた。

そんなクラゲだが、タコの妻が死んでからというもの、様子がおかしい。食欲が落ちたようだし、以前よりついて来ることが多くなったようだった。タコの妻を亡くしたことを、クラゲも理解しているようだ……

「タコ」

「!!」

そんなタコの物思いを破ったのは、クラゲが、タコたちが言葉を話すように、触手を使って「話した」という事実だった。

「タコ、イキカエリ、スヨ」

クラゲは確かにそう言った。

クラゲは不死であった。クラゲは決して賢いとは言えなかったが、クラゲには経験があった。クラゲは地球の海を知る最後の新人類以外の生命であった。

クラゲもまた、知恵の実を与えられていた。しかし、クラゲはポリプの花となって生まれ変わるたびに若返っていたので、「知恵の実」を与えられてもなお、幼子が自死を望まないように、自死を試みることが困難であるように、クラゲは生を繋いでいた。繋いでいたはずだった。クラゲがポリプの花になっているうちに、クラゲの片割れは自死を選んでいった。クラゲは自分の無力を知った。その兆候自体はあったのだ。クラゲの片割れが一向に生殖を望む様子がなかったのは、強く「知恵の実」の影響を受けていたからだった。

クラゲはタコのところに来てからも、やはり力なき生き物であった。クラゲは、タコに従属することで生存が得られるのだと知り、それだけを目当てにしてきたが、タコの妻にも何もしてやることができなかつたとき、自らの果たすべき役割を悟った。クラゲにはつがいがいなかったし、タコたちの青くて濃い血液は、クラゲには流れていなかった。しかし、クラゲには家族がいた。タコの妻を喪ったことを嘆いたクラゲは、「知恵の

実」を直接賜った世代に色濃く残った新人類の「知恵」により、蘇生の力を持つという<使役者>の存在を思い出した。

エウロパにはエウロパに特有の生命がいた。新人類が作り出した<使役者>たちだ。しかし、正確には彼らが改造したことで「生命」になったのであって、生み出したのではない。<使役者>たちはエウロパの熱水噴出孔生まれなのだ。この星に生まれた全く新しい系統の命たちは、水素をエネルギー源とし、二酸化炭素を酸化することで炭素固定していた。あまりにも原始的な姿をしたそれは、命の本質を体現していた。代謝系を有し、自己複製が可能であるが、細胞という形状を有していない、膜無き機械なのである。そこに膜を与えたのが、他ならぬ新人類だった。膜を与えられ、安定した<使役者>たちに、新人類はいくつもの実験を行った。

はじめ<使役者>たちには人工の膜が与えられたが、実験の過程で生命の死骸を与えられ、それに適応する様子が見られた。原生生物から脊椎動物まで、<使役者>は生命であれば幅広く浸透した。果ては、<使役者>は生体電位により不可思議に神経系を支配した。これは、死骸である宿主——従属者に二つの変化をもたらした。一つ目は、緩やかな電気ショックによる蘇生、旧人類風に言えば、「生きたAED」としての作用である。二つ目は、反出生主義や希死念慮の克服だった。寄生者が宿主を殺すとは限らない。あるケースではむしろ、寄生者は宿主を殺さない程度に生かすことで、他の生物にも寄生し、より増殖しようとするのだ。<使役者>たちはそれを知っているかのように従属者を生かし、生殖を促した。

これは画期的な発見かに思えた。しかし、人類はもうとっくに安定したいくつかの蘇生術を手にしていたので、この自己同一性が保証されるか危うい方法をついぞ自らに試すことはなかった。人類は<使役者>たちを一部を残してもとの熱水噴出孔に戻した。

そもそも何故エウロパに生命を生み出し得る熱水噴出孔が存在しているのか。木星とエウロパの間では自転と公転の同期が起きている。このような場合には潮汐力が強く働き、この潮汐力によってエウロパの内部海は凍らずに保たれている。それだけではない。エウロパは公転運動の半径が比較的小さいため、遠心力によって、木星から見て背後に奇跡的にホットスポットが発生したのだ。海底付近にマグマが存在してしまえば、熱水噴出孔もまたできるというわけだった。

クラゲは熱水噴出孔のありかに思い当たりがあった。クラゲに「イキカエリ」の手順について説明を受けたタコは機を伺い、街の景色に擬態すると、タコたちの目を避けて街の外に出た。成年者であろうと街の外にむやみに入るものではない。タコは自分が禁忌を犯そうとしていることは知っていた。タコが向かったのは、膨らんだフグのような、岩盤が丸くぼこぼこして石畳を敷くことができない地帯だ。

ずいぶん街から遠くまで来てしまったが、タコは目当てのものを見つけた。湧き上が

る海中の煙だ。それはあたたかく、街からあぶれたタコたちが集まっていた生物を食べながら暖をとっていた。

タコは近くの地面から柔らかい部分を見つけると、そこを掘った。途中、氷の手ごたえが感じられたので、冷たさにも構わず夢中で海底を削った。すると、超臨界で液体となった二酸化炭素がたくさん出てきた。当たりだった。

喜び勇んだタコはそこら中を掘って回って生物を探したところ、カニがいた。タコはひとおもいにカニをちぎった。ついでに、腹がすいていたのでそのかけらを飲み込んだ。ちぎられたカニの一部は依然として動いていた。そう、それは確かに<使役者>によって動かされたカニであった。タコはその<使役者>の塊とも呼べるカニの肉の一部を持ち帰った。

タコは<使役者>の塊を腕に抱え、再び街の外れの墓地を訪れた。タコが目的の物をクラゲに見せると、クラゲは不安そうに(クラゲの表情はタコにはわからなかったが)

「ソレ、タブン」

と答えた。

二匹がやっているのは伝説を辿るような真似であって、いつまでも何の確証も持てないままだが、それらしい成果を上げることができたとなって、次の段階に進むことになった。

タコは<使役者>の塊を持つのは別の腕でクラゲをぐるぐる巻きにして、思い切って大きく水を噴射した。タコは水面を目指していた。タコの三つある心臓は早鐘を打ち、しなやかな肉体は水圧の急激な変化に耐えた。ようやく水面を捉えた頃には、タコとクラゲは満天の星に見とれていた。二匹が「天」に見た星たちは、死者に括られる浮きであった。

その日はエウロパにとって久々の流星群の日であった。新人類の入植によって大気が厚くなったエウロパは、流星を経験した。目前の木星にもまた流星は降り注ぐが、彗星のかけら程度では木星の表面に変化を見出すことは難しいだろう。小惑星程度のものが墜ちれば辛うじて閃光が目撃できるはずだ。木星は重力が強すぎるため、小惑星が衝突することも珍しくないのだ。

タコとクラゲは初めて海上に顔を出した。タコはその時、この二つ目の「天」に存在するものを「星」だ、と思った。そして、本来の「星」とはこれなのだ、と直感的に理解した。

二匹はしばらく見とれていたが、自分たちの目的を思い出して、「天」を見渡した

「天」はいくつもの屍と浮きで満ちていたから、タコの妻を見つけるのは時間がかかりそうだった。しかし、タコは浮きに入れたいっとう綺麗で小さなかわいらしい貝殻のことを思い出し、クラゲに手分けしてまずはそれを探すことを提案した。その背後に光が迫っていたのに、二匹はしばらく気がつかなかった。

先にそれを見つけたのはクラゲだった。クラゲが腕を抜け出し、いそいそとどこかへ逃げ出そうとするので、タコは何の気なしに振り向いた。

そこには、星たちがいた。タコはそれを見たことがなかったが、浮きでちらちらと光

るので、星たちだと思った。

星たちは屍を積み上げてできているようであった。死への恐怖から、タコはクラゲの方へ後ずさりした。しかし、星たちは蠢き、追いかけるように腕とも知れない何かを差し伸ばしてきた。それは死体と死体とを繋ぐ器官らしく、哺乳動物の肌のような質感を持っていた。

星たちは下を指して、腕らしきものをくねらせ、タコの言葉で「帰りたい」

と言った。

星たちには浮きが絡みつき、沈むことができないようだった。

タコは不憫に思った。

タコは近づいた。タコは星たちの中に妻を探した。タコの妻のなきがらはやはりそう遠くへは流されておらず、屍を十を数える頃には見つかった。タコは親切と平静を装った。タコはその冒瀆的な見た目に耐えられなかった。タコは妻に結ばれた浮きを丁寧に噛んで切り離してから、使役者の塊をそっと口にさせ、妻と星たちを繋ぐ器官を噛みちぎった。妻のなきがらはゆっくりと海底へ降りて行った。

星たちは憤怒した。当然ながら、星たちの腕のような器官には神経が通っていた。星たちは死体に巢食う寄生生物であったから、せっかくの栄養源の一つを奪われたのも怒りの発端になった。

星たちの瞳が一斉にタコを見て、それから、星たちは泣いた。

眼孔から超高濃度の塩水を分泌した星たちから、死のつららが伸びた。

それを見たタコは、それがなんであるかわからないなりに、マズい事態だぞとは思ひ、妻のなきがらを掻っ攫ってすぐさま下へと沈んでいった。

クラゲは少し離れたところにいたからか、小さすぎたからか、星たちに見つからずに済んだので、遅いながらもいそいそとタコの後を泳いでいった。

星たちは、つららが海底へと伸びていくのを見てはたと思いつき、自らからつららを切り離し、つららを辿って無理矢理降りて行った。星たちは沈むことを覚えたようであった。

タコとクラゲが降りているうちにも、つららが地面に伸びてくるのが見えた。その軌道は、明らかに墓地を、街を貫くようであった。

しかし勿論、タコは死者の領域である海面に行ったことなど街の住民に話す気はなかったのだ、

「でも、彼らは君を助けようとはしなかったんだ」

と言い訳がましく独り言を連ねた。

実際のところ、死のつららは墓地に届いたが、幸いにも海底を辿って広がるのは苦手としたようで、街中を凍り付かせるまでにはならなかった。ただ、氷が石畳や建物を一閃し、多少の不便をもたらしたのと、興味本位でつららに触れたヒトデの子どもが巻き込まれて死んでしまった。

タコが海底に戻った頃、タコの妻はようやく目を覚ましたようであったが、事態を飲み込めないようだった。しかし、タコの妻はタコに抱えられていることを認識すると、以前のように全てを拒絶するように腕を振りほどいた。

こうなることを察していたタコは一言、
「子どもたちも！ 家にいるんだ」

と言った。それが卑怯なことだとは知っていたけれど、タコは最適解を採った。タコの妻ははたと立ち止まった。

タコの妻は、死を経験していくらか冷静になったようだった。少々ヒステリックだが、話を聞いてくれはする。衰弱して重い足取りを、支えるように歩いた。

タコの夫婦は子どもたちを迎えに家に戻った。クラゲは無事に家に帰っていて、もとのように黙ってただ漂っていた。

タコたちはもはや街に留まることはできなかった。星たちは自分たちを追って街にやって来るだろうし、こうも大っぴらにつららが降りてきたのでは、先ほど上方へ向かったばかりの（これは街の住民に目撃されていた）タコが禁じられた「天」への接触をしたことは明らかだったからだ。

タコは、街にいられなくなったことだけを告げて、引っ越しを提案した。それに反対する者はいなかった。タコたちは街での生活以外を知らなかったから、知らないものを拒否しようがなかった。タコは、次に暮らす住処は、食糧も十分そうであるし、熱水噴出孔付近にしようと決めた。

タコの妻は、自らが死んだことに気がついていないようだった。千切れた足を眺めながら、かつてのことを

「空腹でおかしくなっていたみたい。迷惑をかけたわね」

と語り、タコが渡した食糧をあっさりと口にした。タコは自死を否定する言葉を持たなかったから、この言葉に安心した。タコは、妻が、そして自らが、永遠の命を得てしまったことについて語ることをしなかった。

しかし、出産に伴うホルモンバランスの変化は不可逆で、タコたちの文明ではどうすることもできなかった。タコは、一度他者を死の底から救ったからには、最後まで面倒を見なくてはならないと考えていた。それが愛する妻となればなおさらだった。タコは、妻が覆しがたく再び死を望む日がいつか来るとして、そのときは自分ごと捕食者に食べさせてしまおうと、あるいは自分が粉々に噛み砕いて飲み下してやろうと考えていたのだった。タコは希死念慮というものを理解できなかった。タコは、自分は永遠に生を望むであろうと信じていた。タコは永遠の生というものを知らなかった。それは、実際に永遠の命を手に入れた者であろうと、文字通り永遠に知りえないものだった。

新人類は、地球の生命たちに猶予を与えたに過ぎなかった。それは確かに温情であったが、エウロパの海が地球を懐かしめる観光地として楽しまれていたという事情もあった。

水素を失った老齢の太陽は膨張を続け、いずれは木星軌道の近くまで迫る。そうすれば、エウロパ表面の水が解けるどころか、「海」は蒸発してなくなるだろう。

結局のところ、新人類は、扎扎实り種々のDNAを回収、記録しておきながら、地球由来の生命は太陽系と運命をともにするべきだと結論付けたのだ。それは、恒星の生から死までの一連のサイクルに人類以外の何物も逆らえないのだという、人類優位の発想のようで、宇宙の恒常性になるべく従うという、人類の畏敬の念によるものでもあるのだ。

それを知れば、憂鬱な海の生命たちはあるいは喜ぶだろうか。この先、タコたちの青くて濃い血液は薄まり、細々と束の間の春を謳歌することだろう。太陽が墜ちるその日まで。

奥付

奥付

奥付

案山子 2023夏号

<https://puboo.jp/books/page/write/135031>

著者：新潟大学文芸部

<https://puboo.jp/users/sindaibungeibu>

電子書籍プラットフォーム：パプー（<https://puboo.jp/>）

運営会社：デザインエッグ株式会社

案山子二〇二四 冬

著 新潟大学文芸部

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
